

日本中世・近世の地誌と風俗



大高 洋司

中村 康夫

小島 道裕

工藤 航平

西山 剛

荻野 夏木

陳 可冉

大塚 絢子

平成 21 年度総合研究大学院大学文化科学研究科イニシアティブ事業
教員学生連携研究「日本中世・近世の地誌と風俗」報告書

平成二二年度総合研究大学院大学文化科学研究科イニシアティブ事業

教員学生連携研究「日本中世・近世の地誌と風俗」報告書

目的

日本中世（室町後期）～近世にかけての地誌類、風俗資料を広く見渡しながら、それらが大都市を含む各 地域 の歴史・文化・物産・交通など多様な要素をコンパクトにまとめて、当該 地域 の内外で大きな役割を果たしてきたことを検証する。また、地誌における風俗の描かれ方を通して、上方と江戸、都市と地方とのつながり、文化の継承と変容について、参加者の専門分野を超えた多面的理解を目指す。

参加者

- 大高 洋司（日本文学研究専攻・教授 代表者）
中村 康夫（日本文学研究専攻・教授）
小島 道裕（日本歴史研究専攻・教授）
工藤 航平（日本歴史研究専攻・院生）
西山 剛（日本歴史研究専攻・院生）
荻野 夏木（日本歴史研究専攻・院生）
陳 可冉（日本文学研究専攻・院生）
大塚 絢子（国際日本研究専攻・院生）

正式な参加者は以上であるが、総研大、またはそれ以外にもオブザーバー参加して下さった院生の皆さん、展示解説、資料解説、ゲストスピーカー等でお世話になった先生方に、心から御礼を申し上げます。

概要

本研究は、平成二二年度イニシアティブ事業のうち「教員学生連携研究」の一環であり、また前年度中から、二二年度「組織的な大学院教育改革推進プログラム」出願（不採択）のための準備活動として行ってきた「地域 はどのように描かれたか」（一～四月、四回実施）を、発展的に継続したものである。また五月は、日本文学研究専攻「教育研究プロジェクト」の一環として行った。具体的な活動内容は以下に記すが、日本文学・日本歴史両専攻の教員・学生を中心に、「教員学生連携研究」のモデルケースとして、専攻を超えた連携の活性化につなげることを意図して実施され、所期の目的を達成した。

活動記録

【準備活動】

- 第一回 平成二二年一月三〇日、国立歴史民俗博物館、第二研修室
「活動の打ち合わせ」
- 第二回 平成二二年二月二五日、国立歴史民俗博物館、第二研修室
企画展示「錦絵はいかにつくられたか」見学（解説 大久保純一教授）
山東京伝『四季交加（しきのゆきかい）』（序）を読む
- 第三回 平成二二年三月二五日、国文学研究資料館、第三講義室
通常展示「日本実業史博物館からのメッセージ 渋沢栄一と算盤×敬三と広告」見学（解説 青木睦准教授）
名所図会コレクション（解説 中村康夫教授）
『四季交加』（春の部）を読む
- 第四回 平成二二年四月二二日、国立歴史民俗博物館、第二研修室
歴博所蔵資料見学（松村月溪 呉春 「京都年中行事 写」など）
研究発表 工藤航平『忍名所図会』について
『四季交加』（春の部）を読む
- 第五回 平成二二年五月二〇日、国立歴史民俗博物館、第二研修室

洛中洛外図屏風「歴博E本」閲覧（解説 小島道裕教授）

『四季交加』（春の部）を読む

【正規活動】

第六回 平成二十二年六月二十四日、国文学研究資料館、第三講義室

「洛中洛外図」の『京童』利用をどう考えるか」

岩崎均史氏の関連論文を読む

某古書店所蔵の『京童』について、書誌的吟味を行う（解説 入口敦志助教）。

第七回 平成二十二年七月二十九日、国立歴史民俗博物館、第二研修室

連携展示「百鬼夜行 百鬼夜行絵巻の系譜」見学

『四季交加』（夏の部）を読む

第八回 平成二十二年一〇月九日、国文学研究資料館、第三講義室

特別展示「江戸の長編読みもの 読本・実録・人情本」見学（解説 大高洋司教授）

『四季交加』（夏の部）を読む

第九回 平成二十二年二月一日、国立歴史民俗博物館、第二研修室

「洛中洛外図屏風歴博甲本」の原本公開見学

研究発表 荻野夏木「道行く宗教者 半田稲荷の願人坊主と疱瘡」

『四季交加』（夏の部）を読む

第十回 平成二十二年二月九日、国文学研究資料館、第三講義室

特別展示「能楽資料」見学（解説 落合博志准教授）

「都市図を文学から読む」（ゲストスピーカー 井田太郎助教）

第十一回 平成二十二年二月二七日、国立歴史民俗博物館、第二研修室

研究懇談 陳可冉「名所の文事、文事の名所」

『四季交加』（秋の部）を読む

以上

目次

「四季文加」の挿絵を読む 春・夏	日本文学研究専攻(教員) 大高 洋司	5 頁
「洛中洛外図屏風から風俗画と地誌へ」	日本歴史研究専攻(教員) 小島 道裕	37 頁
「道行く宗教者 わいわい天王と願人」	日本歴史研究専攻(院生) 荻野 夏木	44 頁
「名所図会と絵画資料との照合の面白さ 研究報告に代えて」	日本文学研究専攻(教員) 中村 康夫	52 頁

山東京伝『四季交加』の挿絵を読む 春・夏

日本文学研究専攻(教員) 大高洋司

はじめに

「概要」「活動記録」に記したように、平成二十一年一月～二十二年一月の丸一年(準備活動を含む)にわたり、歴博と国文研の間を歩き来しながら教員学生連携研究「日本中世・近世における地誌と風俗」(通称「地誌研」)を実施した。発足にあたり、毎回異なる材料を用意するのも少々辛いというので、参加者全員が興味をつなげるようなテキストを選んで、進行の軸とすることになり、私の提案した「四季交加(しきのゆきかい)」が幸いメンバーの賛同を得、その役割を果たすことになった。とは言え、決して良く知られた作とは言えないものなので、『日本古典文学大辞典』から、鈴木重三氏による要を得た紹介を引用しておきたい。

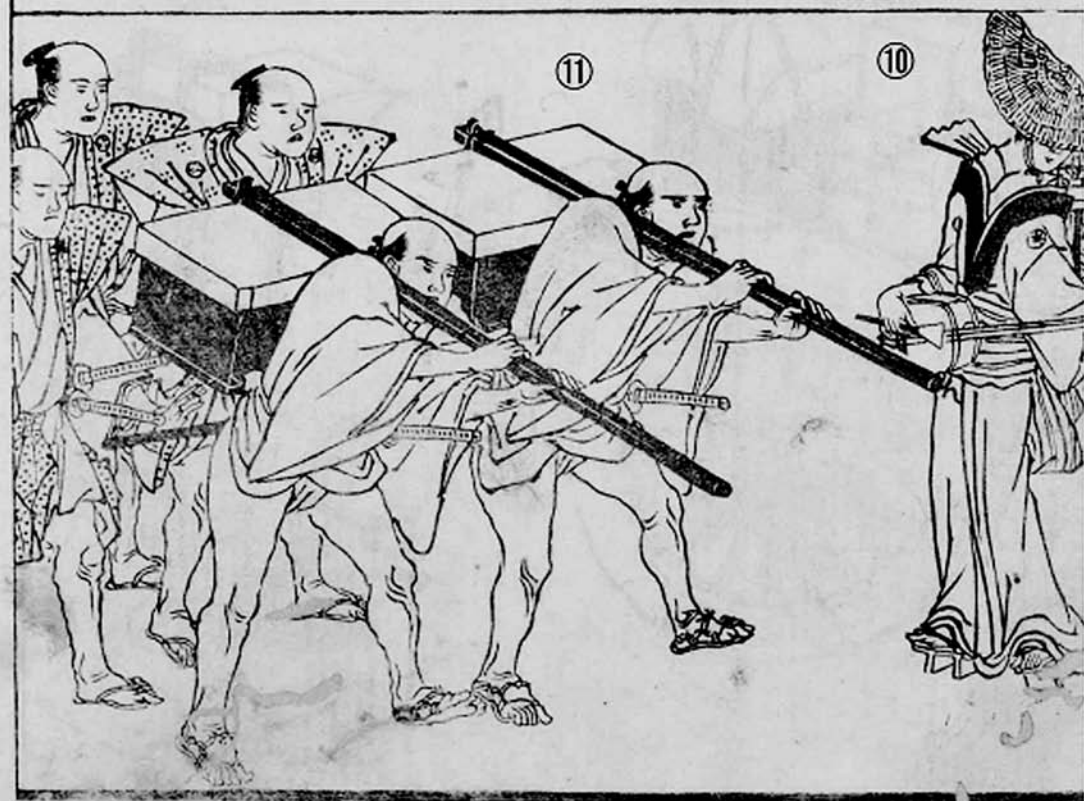
二巻二冊。絵本。山東京伝作、北尾重政画。寛政十年(一七九八)江戸鶴屋喜右衛門刊。…【内容】江戸市中の路上を歩き交う貴賤士女老少諸人の風俗を、絵師重政が四季を通じ各月に描き分け、京伝の詞書を添えた墨摺りの風俗絵本。各冊、前半挿絵、後半詞書の様式。絵は見開きを上下二段に分け、一丁に一月ずつの構図。上巻は春夏で正月から六月、下巻は秋冬で七月から十二月を収載。筆致克明で風俗資料として有意義。

「地誌研」で『四季交加』を取り上げた理由について、もう少し説明を加えれば、本作は、寛政改革の際に、筆禍によって処罰を被った江戸戯作の中心作者山東京伝が、従来の黄表紙・洒落本などとは異なる視点から取り組んだ詞書と絵による江戸賛歌であり、後半生に精魂を傾けた風俗考証の反映の見られる、転換期の作例でもある(井上啓治「京伝考証学と読本の研究」序章・第一部第一章、新典社、一九九七 拙稿「山東京伝 江戸っ子気質」、「解釈と鑑賞」、二〇〇一・九)。京伝の考証は、自らを育んだ 江戸 の文化的根源を近世前期に求めた考証随筆『近世奇跡考』(文化元年 一八〇四 一二月刊)から、さらにそれ以前をも視野に収めた『骨董集』(文化一一 一二年 一八一四～一五 刊)の世界へと向かって行くが、その目指す方向は、「地誌研」で歴博側の中心となった小島道裕氏が、近著『描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む』(吉川弘文館、二〇〇九)の中で指摘する、当初は「権力者を主題とする絵」として描かれた洛中洛外図屏風が、「むしろ都市の風俗や名所を描く方向」に転じて行く過程と交差しているのである。

町人である京伝が、今回小島氏が詳細に読み解いた「歴博甲本」のような初期洛中洛外図屏風を直接目にする機会はきわめて少なかつ

月正

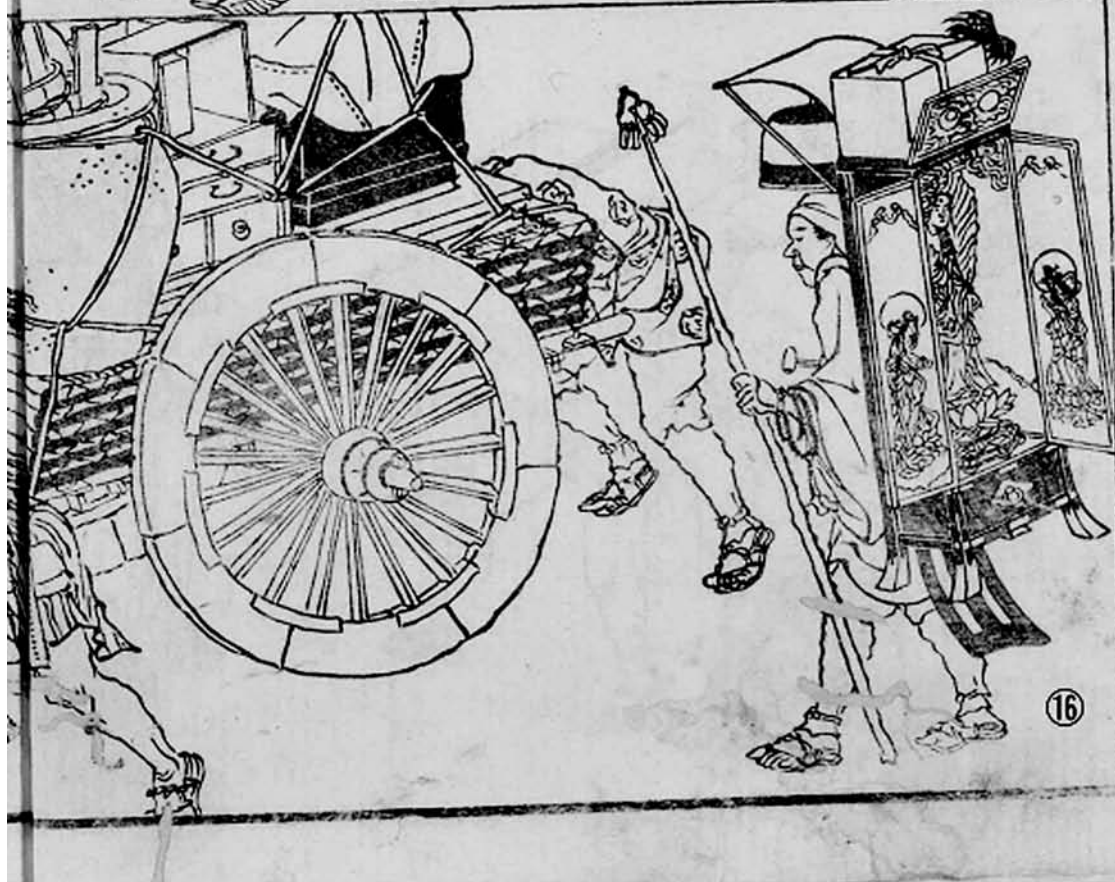




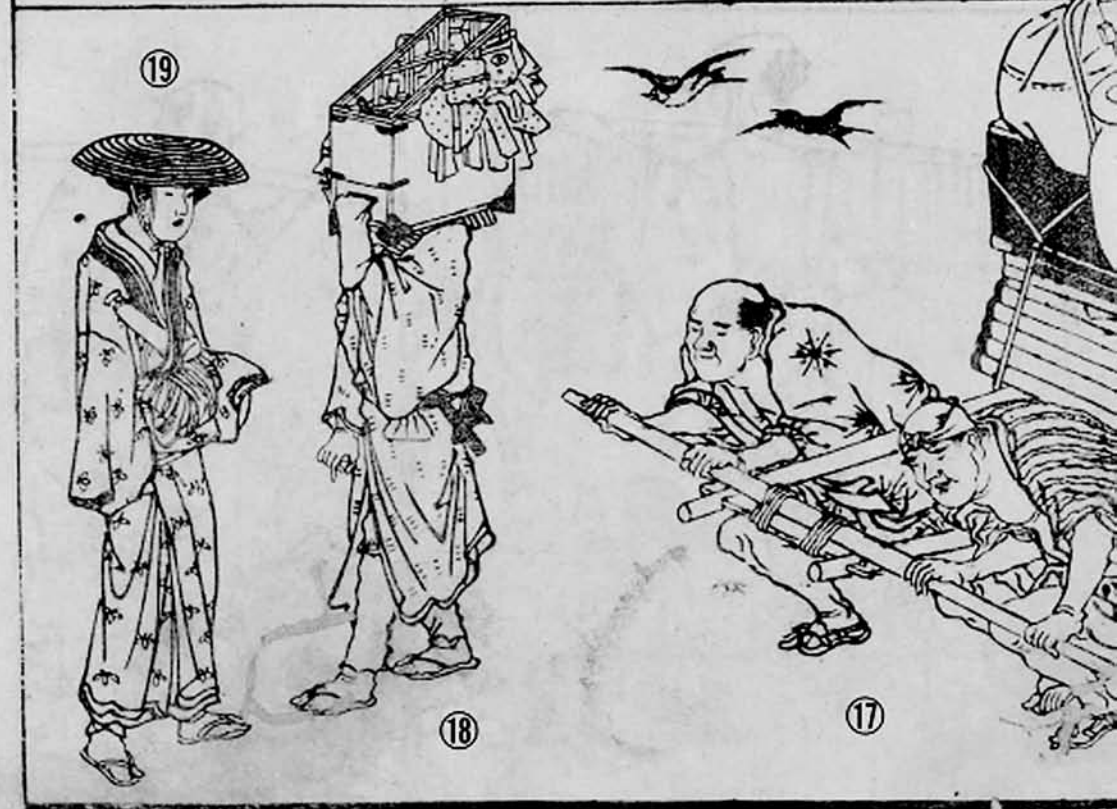
二月

13

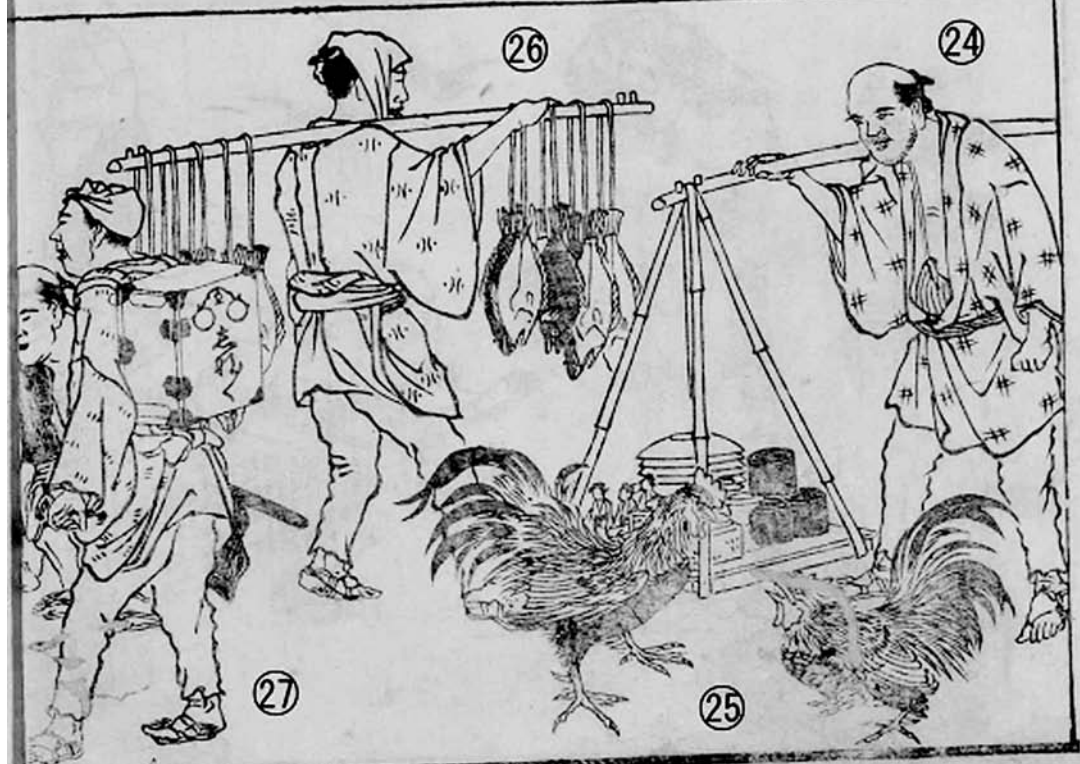
12



16



月三





31



30



36



35

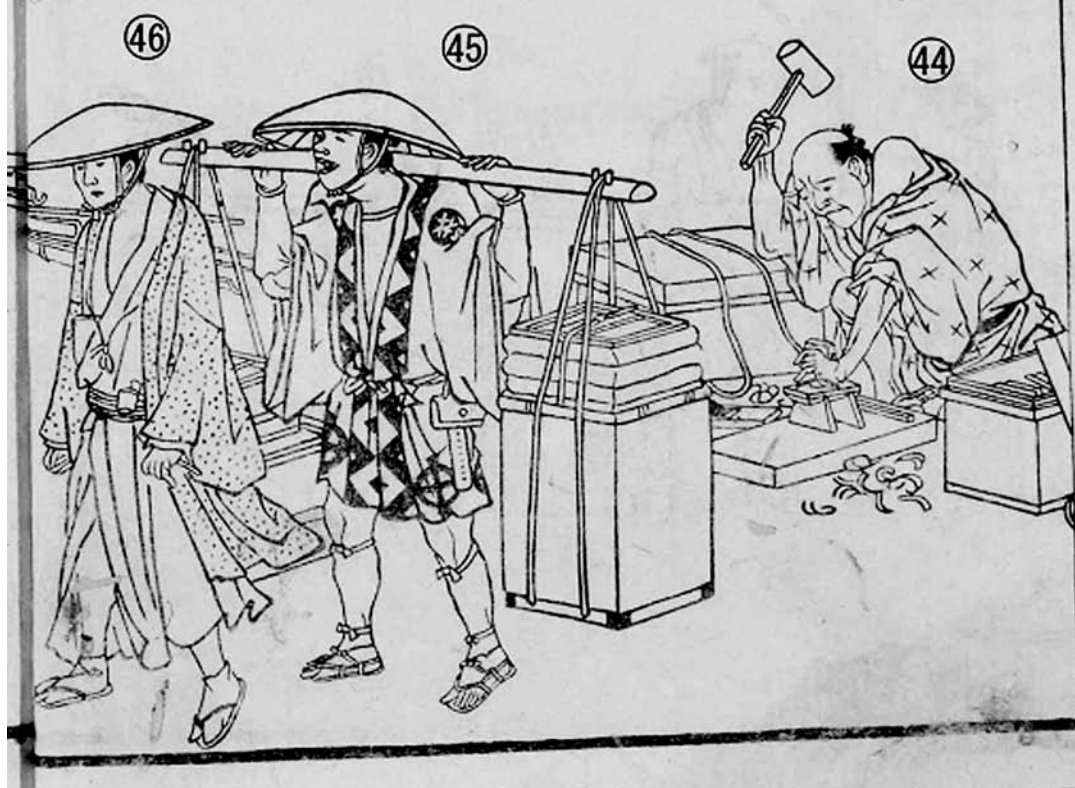


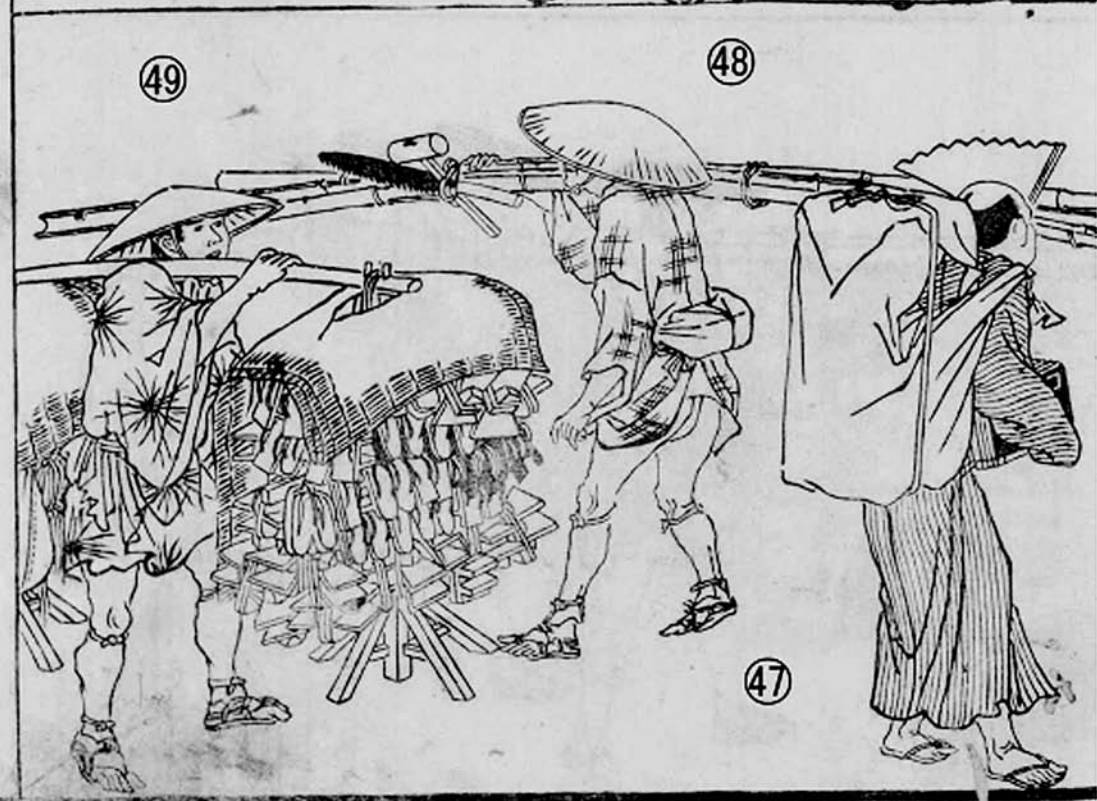
34

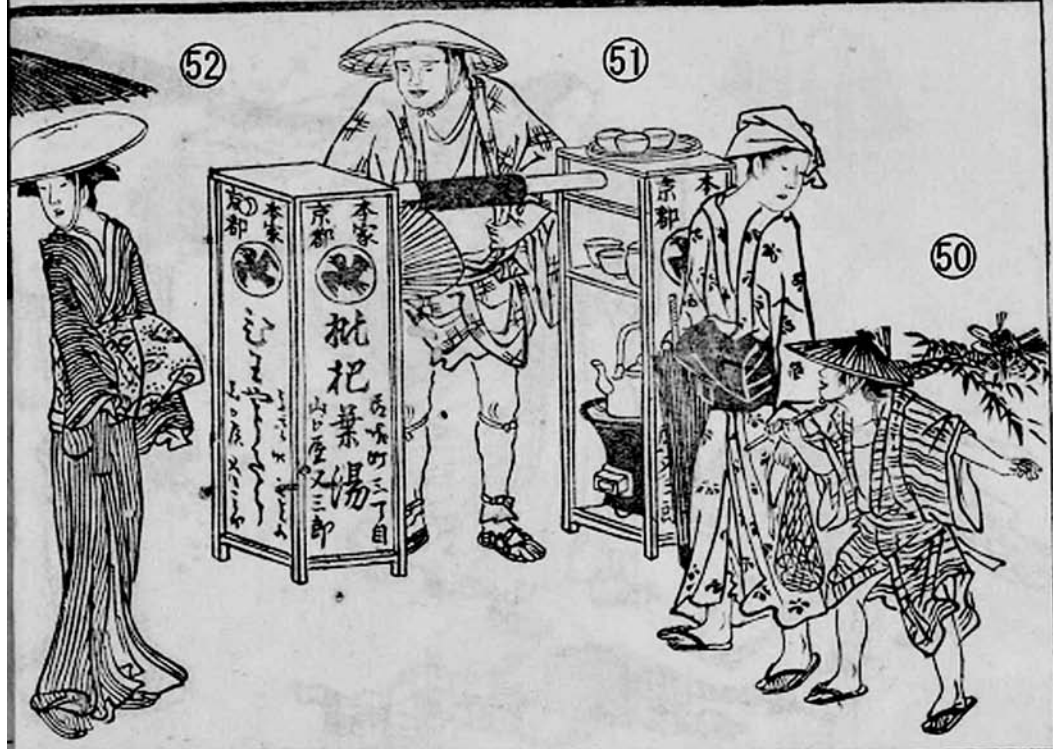


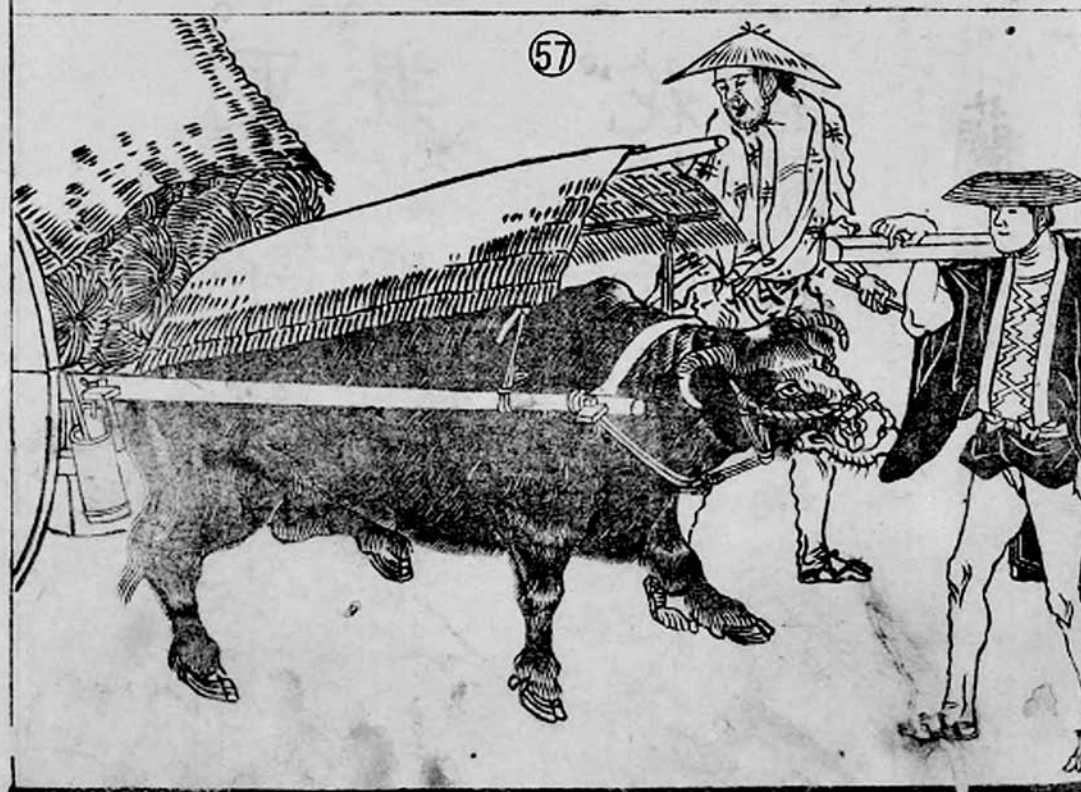


月五









たといって良く(ただし、京伝の人脈から見て皆無とは断言できない)見ていたとしても、絵の中に当時の権力構造を見出すような読みの可能性を追求することは、考えもしなかったであろう。しかし京伝は、初期洛中洛外図屏風(十六世紀)より以前と見られる『七十一番職人歌合』(十五世紀後半成立、明暦三年 一六五七 刊 延享元年(一七四四) 修訂 の版本あり)に注目して、しばしば引用もしており、中世後期にあらわれてきた前期と異なるさまざまな要素が、近世的なかたちに定着していく経緯を、職人尽絵と洛中洛外図をたどっていくと、具体的に明らかにすることが可能だと思えます。』という網野善彦氏の言(『古典講読シリーズ 職人歌合』、岩波セミナーブックス一〇六、一七九頁、一九九二)を、十九世紀初頭において、専ら「職人尽絵」の側から実践していた、ということになるのである。

こうした点が最初から良く分かっていたわけでは、もちろんないのだが、『四季交加』が「グレートマザー」としての洛中洛外図屏風の流れにあるという予想は、いちおうあった。それは、過去に二度ほど『四季交加』を講読の教材に用いており、内容について予備知識があつたためであるが、力点を置いていたのは、春夏秋冬の江戸の都市風俗を豊かな表現で描き出した「詞書」の、国文学の立場からの読解であり、「見開きを上下二段に分け、一丁に一月ずつ…上巻は春夏で正月から六月、下巻は秋冬で七月から十二月を収載」(鈴木重三氏)した挿絵(口絵)を正面から扱ったのは、今回が初めてと言って良い。タイトルにも掲げたように、以下の報告は、『四季交加』

の挿絵(口絵)部分の読解である。絵師の北尾重政は、京伝の浮世絵の師匠に当たる人であるが、京伝自序にも京橋銀座一丁目にあつた店(紙煙草入れ・喫煙具の販売、通称「京伝店(だな)」)から道行く人々をスケッチしたというように、作者自身の下絵に基づくものである。研究会のたびにメンバーの皆さんからご教示いただいた事柄を、できるだけ生かしながら、新しい発見も含めてまとめた。なお、研究会では、序文から「秋」の初めの部分まで読み進んだが、今回は「春・夏」の部を対象としたことをお断りしておく(掲載図版は、大高架蔵本に拠った。また、諸職の説明に、今日の人権意識に照らして相応しくない言葉の用いられる場合があるが、学術的な見地からそのまま残した。よろしくご了解をいただきたい。)

1. 春 正月

万歳

本文 万歳(まんさい)は屠蘇(とそ)に酔(ゑふ)て踉々(らう々)に飽(あき)て腹鼓(はらつゝみ)うちならし。

解説 「万歳」は新年の季語。本文でも、諸職の筆頭として「春」の部冒頭に登場する。先に立つのは太夫。折烏帽子を被り、大紋の素襖(すおう)、大小刀を帯びる。従うのは才蔵。侍烏帽子を肩にかけ、背負うのは米袋か。左手に持つのは高下駄。

本文の「踉々(らう々)踉々(らう々)」は中国白話語彙で、「足モトノヨロヨロ」

スルコト」(『俗語解』)。また腹鼓は、天下太平を意味する故事成語「鼓腹撃壤」を踏まえる。

『人倫訓蒙図彙・七』(元禄三年 一六九〇 刊)に「京に出(いづ)るは、大和より出る。中国は美濃より出る。東へは三河より出るなり」(平凡社東洋文庫、一九九〇、二九〇頁 以下同)。

『守貞漫(謾)稿・二十六』(嘉永六年 一八五三 凡例)に、京坂と江戸の差異について絵入りで詳細に解説し(東京堂出版 活字、一九九二、七八〜九頁 以下同)、鏝形蕙斎画『近世職人尽絵詞』下巻(詞書・山東京伝、文化三年頃成)に絵を載せる(『江戸職人づくし』、岩崎美術社、一九八〇、下 2 以下同)。

福寿草売り

本文 福寿草を買ふてもどる人相見あれば。

解説 「福寿草」は新年の季語。『和漢三才図会・九十二』に「歳旦二初テ黄花ヲ開ク。半開菊花ニ似タリ。人以テ珍ト為ス。盆ニ植テ元日草ト称ズ。」(東京美術 影印、一九七〇、下 一一八八頁、読み下しにして示す。以下同)とある。また『角川古語大辞典』に、「江戸中期ともなれば庶民の家庭でも、元日に福寿草を飾ったらしい」とする。本文は「人相見」(易者)が主体で、一年間(凶相でなく)福相に巡り会い続けることを祈って、縁起物として福寿草を買う、の意。

礼者

本文 かけ乞(こひ)は礼者(れいしや)と変(へん)じ。

解説 「礼者」は年賀の挨拶に回る人で、新年の季語。上下を着し、右手には扇子。連れているのは小者で、右手に下げた風呂敷包みには年賀の品(扇子等か)が入り、左手に抱えた盆に載せて相手に献ずるのであろう。本文の「かけ乞」は、年末、掛け売りの代金を請求に訪れる者。井原西鶴『世間胸算用』(元禄五年 一六九二 刊)巻二の四などは、大晦日における「かけ乞」との駆け引きを描いて秀逸であるが、ここは、一夜明ければ同じ人が年礼の客として訪れる滑稽。

宝船売り

本文 宝船売(たからふねうり)は乗初(のりそめ)の猪牙(ちよき)に。いちはやく走(はし)り。すこ六売(ろくうり)は街(ちまた)を繞(めぐ)りて、八(や)から鉦(かね)をうつよりもせわし。

解説 「宝船」は新年の季語。『守貞漫稿・二十六』に「京坂八、近世廃衰ス。江戸八、今モ専ラ、元日二日ノ宵ニ、小民売(レ)之巡ル。宝船ノ印紙ニ、道中双六ノ印紙ヲ兼売ル。其詞曰、道中双六オタカラ。今夜ノ夢ヲ、初夢ト云。故ニ、吉夢ヲ見ント、宝船ヲシクコト也。」とあり、図を載せる(四 八一〜二頁)。

の図版では宝船のみを扱っているように見えるが、本文及び『守貞漫稿』に言う「すこ六売」と重ね合わせると、売り歩く際のせ

わしさが特徴のようである。本文の「猪牙」は、吉原通いの際に使う快速船で、宝船とは、「船」と「初買」の縁でつながっている。また「八から鉦」は「八丁鉦」ともいい、「若衆が首や腰にたたき鐘（鉦）をつけて、打ち鳴らしながら一心に踊る大道芸」、『日本国語大辞典』。『人倫訓蒙図彙・七』に、「八打鐘（はっちようがね）」の項目があり、図も載る（二七二頁）。

未詳

修行者姿で大小刀を帯び、二名の従者（上下着用・挟み箱持ち）を連れた人物については、現在不明。ご教示をお願いしたい。

羽子板・追い羽根

解説 京伝『骨董集』上編下之巻前（文化二年 一八一五刊）、羽子板三に、「正月女兒（めのわらは）のもてあそぶ羽子板の始（はじめ）（詳）（つばら）ならず」として考証を記す。『守貞漫稿』はこれを受けて江戸の羽子板の形状を記し（二十六、四 八四〜五頁）、また京坂と比較しながら沿革を述べる（二十八、四 一八〇〜三頁）。

猿曳き（猿回し）

本文 猿曳（さるひき）も棧梯（かけはし）のあぶなきを思（おも）はず。

解説 『守貞漫稿・七』に、「猿回シトモ云。江戸八弾左工門部下也。

…江戸八猿引甚々多く、毎日十数人来リ乞フコトアリ。京坂八甚々

稀也。三都トモニ、其扮、古手巾ヲカムリ、敝衣ヲ着シ、二尺バカリノ竹ヲ携フ。大名等ニ召ル（、）者ハ羽折、袴ヲ着ス。」（一 三六）とある。これを受けて、花咲一男氏は「大名に召さるる者は云々と毎年正月に行つ馬の病気を追い払う行事の時の服装を云う」（『絵本江戸の乞食芸人』、太平書屋、二〇〇五）とする。は、羽織袴を着けており、花咲氏指摘のケースに当たるのであろう。

本文に「棧梯のあぶなき」とあるのは、（山）猿 木曾 「木曾の懸け橋」連想によるが、猿曳が特に木曾から来るものとされていたわけではないようである。

なお、近世前期京都の「猿舞（さるまはし）」については、『人倫訓蒙図彙・七』に詳しく（二八〇頁）、『近世職人尽絵詞』中巻（詞書・手柄岡持（朋誠堂喜三）、文化二年成）中 16に描かれる猿回しは、こちらに近い。

凧揚げ

本文 昏鶯（いかのぼり）は風にひるがへつて。列子（れつし）がおもむきを思（おも）ひ。出（で）かはり女のもすそにからまりては。術（じゆつ）をうしなふ仙人に似（に）たり。

解説 に対する男子の正月の遊びは、「毬杖（ぎつちやう）（、）ぶり（、）」（共に『骨董集』上編下之巻前）であるが、文化期にはすでに飾り物として残存するのみである。凧揚げ（紙鳶 いかのぼりとも）は、『守貞漫稿・二十八』に、「大坂八、正月末ヨリ二月ヲ專トシ、…江戸八、早春ヲ專トシ、正月十五日、十六日、市中丁稚、宿

オリト称へ、父母ノ家二帰ル。此丁児等専ラ弄(レ)之コト也。故
二此二日ヲ盛トス。(四 一六二丁四頁)とあり、特に正月に限定
されてはいない。引用した本文も正月ではなく三月の記述の中に含
まれるものだが、図版では、奴胤が「出かはり女」(図版澹、推定)
ではなく外出した若い娘の裾に絡まっている。咎め立てせず、笑顔
で対応する母親。その後ろに、着替えを持った中間。

以下本文に略注を加えれば、出替わり(一年または半年契約の奉
公人の交替)は、寛文九年(一六六九)以来、幕府により三月五日、
九月五日と定められた。列子は「中国戦国時代の道家」で「道術を
得て良く風を御したという」(『角川古語大辞典』)。一方「術をうし
なふ仙人」は、『徒然草』第八段「久米の仙人の、物あらふ女の脛(は
ぎ)の白きを見て、通を失ひけんは、…さもあらんかし」の一節に
基づく。

未詳

解説 「鳥追(敲与次郎 たたきのよじろう)か。ただし、『守貞
漫稿・二十六』には「其扮、笠ヲカブリ、覆面ヲ掛ケ、布袋ヲ持チ、
元日ヨリ、十五日ニ至リ、手ヲ搞キ、祝語ヲ唱へ、門戸ニ抛テ、錢
ヲ乞フ、…安永、天明ノ比迄来リシガ、其後廃ス。」(四 八〇頁)
とあり、とは扮装が異なり、寛政頃には廃れていたようである。

の男の衣装と頭巾は、同じく『守貞漫稿・二十六』に、「男子新
服ヲ着シ、緋縮緬ノ投頭巾ヲカムリ、寿ギ唱歌ニテ、三味線ヲ弾キ
ウタヒ…」(四 八一頁)とある「大黒舞」を連想させるが、同項

目に「大黒舞」は大坂の風俗で、「江戸ニテハ、吉原ノ傾城町ニアル
歟。其他ハ、更ニ無之。」ともいう。図の位置関係から と関係が深
いものと考えているが、あるいは分けて考えるべきかもしれない。
ご教示をお願いしたい。

鳥追い(女太夫)

本文 節季候(せきざろ)は鳥追(とりおひ)と化(け)し。
解説 『守貞漫稿・二十六』のと同じ項目(四 八〇頁)に、「今
世、江戸ノミ鳥追アリ。常年、女太夫ト称シ、菅笠ヲカブリ、三弦
ヲ弾テ、錢ヲ乞フ女非人、元日ヨリ、十五日迄、衣服、平日ト同シ
ト雖ドモ、新綿服ヲ着シ、常ノ如ク、紅粉ヲ粧ヒ、唯、平日ニ異ナ
ルハ、編笠ヲ着シ、三弦ノ唱歌ヲ異ニス。」とあり、『守貞漫稿・七』
(一 一三三丁三頁)にも「女太夫」についての説明が載る。

との関係は未詳であるが、本文にいう「節季候」(歳末に現れる
門付け)は男性であるから、とペアにして「鳥追」と考える可能
性も、なお残されているように思う。

「高級武士の年礼」

挟み箱持ち二名を先頭に立てて、先払いの武士たちが来る。この
後に、主を乗せた駕籠が続くものと思われる。大名ないし幕臣等が、
年礼のために登城する様子と考えている。

飴売り

本文 飴売(あめうり)の老(おひ)をやしなふいとなみを見(み)ては。

解説 『守貞漫稿・六』の「飴売」の項(一 一七九頁)に、「三都トモニ、其扮定ナク、又、飴制ニモ数種アリ。又、毎時種々ノ異扮ヲシテ買(売)之者アリ。故ニ、コレヲ凶スルコトヲ得ズ。」とし、また「麩菓子売、製菓ウリ等数種無窮、又毎時、異扮ヲナス者際限ナシ。故ニ、是ヲ凶スコト能ハズ。或ハ女扮シ、又ハ唐扮シ、又ハ小兒ニ扮スノ類也。」という。『近世職人尽絵詞』下 8に描かれた飴売りは、露店風で、全く異なる風体である。

本文の「老をやしなふいとなみ」は、『淮南子(えなんじ)』に見える柳下恵の故事によるが、より直接的には、風来山人(平賀源内)『根無草・二』、「曾子(そうし)は飴を見て老を養んことを思ひ、盗跖(とうせき)は是を見て錠をあけんことを思ふ。」の一節を踏まえ

初午詣

本文 稻荷祭(いなりまつり)の太鼓(たいこ)は。天(てん)にひゝめてはつ雷(かみなり)の臍(へそ)をおどろかせ(。)

解説 二月最初の午の日の稻荷詣で。供の者が稻荷の絵馬を下げている。『守貞漫稿・二十六』に、「江戸ニテハ、武家及市中稻荷祠アル事、其数知ベカラズ。武家、及び市中巨戸、必ラズ在(レ)之。又、

一地面専ラ、一、二祠在之、無之地面甚ダ稀トス。諺ニ、江戸ニ多キヲ云テ、伊勢屋、稻荷ニ犬ノ糞、ト云也。今日、必ラズ皆、祭(二)是稻荷祠(一)。(四 九〇頁)とある。

同項目に、「正月下旬以来、太鼓を担ヒ、市中ヲ売り巡ル。是層見等ナリ。太鼓ト呼ズ、撥ヲ以テ、太鼓ヲ拍子行ク。皆、今日ノ所用ナリ。」とあるのが、本文の「稻荷祭の太鼓」にあたるのであろう。ちょうど「はつ雷(春雷)が鳴って寒暖の入れ替わる季節であり、地上に轟く太鼓の音が、雷を圧倒するというのである。

サボン玉売り

解説 「サボン」は「シャボン」。『守貞漫稿・六』に、「三都トモ、夏月専ラ売之。大坂ハ、特、土神祭祀ノ日、専ラ売来ル。小兒ノ弄物也。サボン粉ヲ水ニ浸シ、細管ヲ以テ吹(レ)之時ニ、丸泡ヲ生ズ。」(一 一八三丁四頁)とあり、凶を添えるが、は「京坂ノサボン売」とするものに近いようである。なお、ここは暖気の視角的表現として掲載したか。

寺子屋への入学

本文 坂(さか)に車をおしのぼせては。初登山(しよとうさん)の寺子(てらこ)をおしゆ。

解説 引用した本文は、の本文に続いて対句仕立てになっている。初午の日は、子供(七、八歳頃)の寺子屋入学(寺入り・初登山)の日でもあるからである。子供は正装した父親に連れられ、続く下男

は天神机を担ぐ。左手に下げているのはけんどん箱か（中は振る舞いのためのソバかウドンであろう）。

本文の「坂に車をおしのぼせては」は、俗歌「手習は坂に車を押しすごとく由断をすれば後へ戻るぞ」山東京伝『絵兄弟』、杖搗つえつき（乃（の）の字）を踏まえる。

『近世職人尽絵詞』に、入学後の「学級崩壊」（？）の様がユーモラスに描かれる（上 6）。

六十六部（回国）

本文 回国（くわいこく）の笈仏（おひぶつ）は。白毫（ひやくがう）より稻妻をはつし。（「秋」の部）

解説 『守貞漫稿・七』に、「諸国ノ神仏ニ順拜スルヲ云。四国トモ、又略テ六部トモ云。其扮、男女トモニ鼠木綿服、手オビ、股引、脚半、甲掛皆同色、各帯前ニ鉦ヲ置付テ腰ニ下ケ、或ハ手ニ鈴（レイ）ヲフリ、銭ヲ乞フ。…或ハ、厨子入ノ仏像ヲ負モアリ。三四人ノ内一人、必ず負之。…西国巡礼及六部ニハ、実ニ参詣ノ者アリ。或ハ、三都トモ乞丐人は二扮シテ出ル者、甚多シ。」（一 一三二六～七頁）とある。

は、服装はほぼ右のとおり、仏像の入った厨子を背負うが、左手に錫杖を持ち、右手に撞木を持って鉦を叩いているのだろうか。また、頭の上には「中央ト周リヲ、紺木綿ヲ以テ包（レ）之、…蘭製ノ笠」（『守貞漫稿・二十九』、四 一一一九）が吊してある。

引越し

解説 家財道具は代（大）八車一台の、単身者（男性）の引越しと見て良いであろうか。の「車」の縁で描かれたのかもしれない。

「代八車」は、『守貞漫稿・後集卷之三』に図を載せ、「図ノ如ク、四夫ニテ遣ルヲ、ヨテント云。或ハ三夫、二夫ニテモ遣（レ）之。軽キ時ハ、一夫ニテモ曳ケドモ、実ハ禁也。世事談（注、菊岡沾涼『近代世事談』）曰、寛文中、江戸ニテ造之。人八人ノ代ヲスルヲ以テ、代八ト号ク。今ハ、大八ト書ク。其頃、営中ニテ、戲言シテ云、人ヲシテ牛ノ如クナラシム云々。」（五 一三九～四〇）

引越ではないが、車屋が代八車を引く図は、『近世職人尽絵詞』にも載る（上 16）。

錠前直し

本文 鎖（じやう）まへ直しもとぎぬ御代（みよ）のありかたさを感じべし。

解説 『守貞漫稿・六』に、図を添えて「損錠失鑰（ヤク）等ノ修補ヲ云也。都テ、今俗ニ修補ヲナホスト云也。是ハ京坂ニハ担ヒ、東武ハ肩上ニ携フ。」（一 一七二～三頁）とする。

本文は に続き、（飴で型をとって）錠前を開けようと企む盗跖（とうせき）のような者のいない太平の世の中に感謝しているだろう、の意。

この女性の職掌、ことに懐に入れているものが何か、見当がつかない。ご教示を乞う。

3. 春 三月

花見1

本文 春風もやふと吹(ふき)わたり。人みな花を賞(しやう)して。野(の)山にあそぶころとなれば。飛鳥山(あすかやま)。御殿(ごてん)山。墨田堤(すだづみ)大井(おほい)村。上野(うへ)の(な)など。三月の(ト)月を日(こと)に出あそべとも。見つくされぬ華(はな)の名所。

解説 母と娘が、弁当を入れたけんどん箱を抱えた下女を連れて花見に赴く。本文の「飛鳥山」以下は、江戸における花の名所。「飛鳥山」は現東京都北区。「元文」一七三六 四一の頃、台命「徳川吉宗の命令」によつて桜樹数千株を植ゑさせらる。…ことにきざらぎ・やよひの頃は桜花爛漫として尋常(よのつね)の観にあらざら。『江戸名所図会』、ちくま学芸文庫、一九九六、五 一五七頁)。「御殿山」は、現東京都品川区。「ことさら、寛文」一六六一 七三の頃、和州吉野山の桜の苗を植ゑさせたまひ、春時爛漫として、もつとも莊観たり。「同、二 三五頁)。「墨田堤」は、「隅田川東岸の堤。寺島(墨田区)以北をいい、須崎以南は牛島堤という。享保十年(一七二五)將軍徳川吉宗の命により桃・桜などを江戸城内吹上御苑から御前裁場、木母寺に移植したのが始めて、同十七年に寺

島村との境から木母寺門前までを植え、その後も補植、近世後期春の遊樂地となつた。」「(『角川古語大辞典』)。「大井村」は、現東京都品川区。『江戸名所図会』「松栄山西光寺」の項に、「庭前醍醐桜と名づくる老樹あり。花は単弁(ひとえ)にして、立春より七十日目の頃より開(さ)きはじむ。その余、ひとへの桜の老樹数株ありて、満花の節は奇観たり。この地第一の花の名所なり。」「(二 八八頁)とある。「上野」は、現東京都台東区。「寛永三年(一六二六)、將軍家光によつて、京都の比叡山延暦寺に擬し、江戸城の鬼門鎮護の靈場として東叡山寛永寺が創建された。桜の名所として知られ、長く江戸士の遊山の地であつた。」「(『角川古語大辞典』)。

澡 植木売り

解説 『守貞漫稿・六』に、「都テ草木ノ類、専ラ此具ヲ以テ担(レ)之。大樹ニ八不(レ)用(レ)之。」「(一 一八二頁)とあり、「此具」の図は澡に描かれたものと等しい。

澤 鳥刺し

本文 鳥粘(とりさし)の袖をしほれてかへらずは。くるゝも知らぬ春雨(はるさめ)の。軒(の)き(つた)ひには…

解説 『角川古語大辞典』に、「近世、幕府に仕える鷹匠に使われて、鷹の餌にする雀を鳥刺竿で刺して歩く者。「餌刺し」ともいわれる。浅黄頭巾にはんてん、大小を差し、腰に籠を付ける。小鳥笛で雀を呼んで刺す。俗間に、幕府の隠密であるという噂があつた。」とする

のが、澤の解説として最も要を得ている。『守貞漫稿』には未載だが、江戸日本橋の表通りを描いた絵巻物『熙代勝覧』（文化二年頃成、ベリン東洋美術館蔵）には、澤に類似した姿の「鳥刺し」が描かれる（小澤弘・小林忠「活気にあふれた江戸の町」『熙代勝覧』の日本橋、小学館、二〇〇六、一〇一頁）。また、「鳥刺し」は中世以前から存在した職業であつたらしく、『三十二番職人歌合』に登場する外、初期『洛中洛外図屏風』にもしばしば描かれている（『洛中洛外図大観』、小学館、一九八七）。

なお、本文は薄暗い春雨の一日、獲物を求めて歩き回っていた鳥刺しが、着物の袖をグツシヨリ濡らして帰っていったことで、やっと日が暮れたことが分かった、の意で、京伝自作の狂歌「青柳のめを糸にして眠らすはくるゝもしらじ春雨の庵」を踏まえる。

澹 「出替り女」

解説 袖頭巾をかぶり、葛籠を背負った供の者の左手には吾妻下駄（『守貞漫稿・三十』五三四頁）、右手に下げた袋状（？）のもの未詳。「出替り女」（あるいは「妾」の出替りか。『角川古語大辞典』によれば、上方はテカケ、江戸はメカケで、年季・半季等様々な契約形態があつた。）と推定し、にも触れているが、ご教示を乞う。

漬 土器（瓦器）かわらけ）売り

解説 担っているのは七厘（京坂は「カンテキ」・火消し壺（以上

『守貞漫稿・三十』一 一八二丁三頁）・土器の皿、及び今戸焼の土人形（同「江戸ニテハ、諸瓦及び瓦器、浅草郷今戸町ニテ多ク製（レ）之。故ニ惣名シテ、今戸焼ト云テ、瓦器ト云ズ」）。

溲 鬪 鶏

解説 三月三日の宮廷行事で、初期『洛中洛外図屏風』にも描かれる（本報告書、小島道裕氏稿参照）。京伝の読本『善知安方忠義伝』巻之三上冊 第八条は、鬪鶏を趣向に用いる。また、『近世職人尽絵詞』上巻（上 13、詞書、大田南畝）にも二羽の鶏が描かれている。

濟 枯魚（干魚）売り

解説 「鮮魚売」の対（『守貞漫稿・六』一 一六六頁）。「枯魚ヲ俗ニ塩モノ、乾物トモ云。鮮魚ノミウルアリ、或ハ、枯魚ヲ兼テ売アリ。京都ノ江戸ノ、魚売如此。」また「乾魚、俗ニ、三都トモ、ヒモノ、又、ヒウヲト云。乾魚也、則枯魚也。枯魚及塩魚ノ類…江戸ハ、日本橋四日市ト云所ニ此市アリ」（一 一六九頁）。濟は、干カレイ（春の季語）の振り売り。

濕 眼鏡売り

本文 秋（あき）来（き）ぬと目（め）には見へねど。眼鏡売（めかねうり）も風の音（おと）におどろき。（「秋」の部）

解説 『角川古語大辞典』に、「眼鏡や天眼鏡を売つたり、新古の交

換をしたり、または破損の修理をする者」とあり、『守貞漫稿・六』には、「眼鏡の仕替」として、「新物ヲ売り、或八新古ヲ交易シ、又八破損ヲ補フ。」(一 一六六頁)と解説する。濕の、商品の入った箱の横面には、「眼鏡(絵)しな〜」とある。

瀆 盲人

本文 座頭(さとう)も犬(いぬ)さくらに馴れ(なれ)。

解説 「座頭」と「犬」は俳諧の付合語にもなっているが、本文は、犬に馴れて吠えられなくなったことと、桜の一種(犬桜)を掛けている。

ここは、座頭がたまたま最高位の盲人(検校)に突き当たってしまい、道に平伏して詫びている様か。検校は「撞木杖、紫衣を許された」(『日本国語大辞典』)が、瀆の立ち姿の盲人の杖は「撞木杖」である。

瀆 花見2

解説 花見1に対して、花見帰りの女性二人(既婚者)。供の者の背負った桶の中と、右手にも折取った桜の花、左手には空の弁当当み。

1. 夏 四月

瀆 遠乗り

解説 『角川古語大辞典』に、「馬に乗って遠出すること。近世、馬

術の稽古のために馬に乗って遠方の社寺や名所に赴くことをいった」とある。乗馬の主は、大身の若殿か。馬乗り羽織に股引姿で、馬柄杓(うまびしゃく)を持った徒歩の供人を従える。

瀆 隠者(歌人)

本文 歌人(かじん)は人丸桜をしたひ。() 隠者(あんじゃ)は西行(さいぎやう)さくらにめで。() 春(の部) 水鶏(くみな)は隠者(あんじゃ)の門(かど)をおとづれ。

解説 『角川古語大辞典』に、「世を逃れて静かに暮している人。中世、都の周辺に草庵を営み、孤独の生活の中に、仏教信仰を持する者が多く、その人々の間から、「さび」の美意識を主軸とする草庵の文学が生れた。隠士(いんし)・遁世(とんぜいしや)とも。」とする。瀆の「隠者」は、もちろん中世の隠者とイコールではないが、『四季交加』自序に「身(ミ) 八世管(セイエイ・ヨノイトナミ) 紛冗(フンジャウ・イソカシ)之(ノ) 間二処(ニ)テ。志(コ)ノロザシ(八江湖(コウコ)間静(カンセイ)之(ノ) 裏(ウチ)ニ在リ。」と述べてもいるように、作者京伝の心情の、なにがしかの投影もあるであろう。瀆は、法体で十徳を着し、上空を行くホトトギス(次丁表、匡郭 きょうかく 外)を眺めている。本文に、「主語は隠者ではないが、「迎梅雨(うのはなくだし)のはれ間には。子規(ほととぎす)のはつねをしたひ。」とある。

濮 虚無僧

解説 『角川古語大辞典』に、「禅宗の一派普家（ふけ）宗の僧。江戸時代には武藏国青梅の鈴法寺と、下総国一月寺がその統制に当ったが、多くの分派があつた。：「薦僧」の称は諸国修行に野宿用のこもを携えていたところから起つたといわれ（雍州府志）、江戸時代「虚無僧」の字を当てるようになって、なお「こもそう」「こもぞう」と読むのが普通である。」とする。

また『守貞漫稿・七』に「虚無僧」の扮装について、「頭二天蓋ト号ス編笠ヲカムリ、尺八ト云笛ヲ吹ク。袈裟ヲ掛テ、法衣ヲ着セズ。藍或ハ鼠色ノ無紋ノ服ヲ着ス。粗ナルハ、綿服多く、稀ニ美服ヲ着スモアリ。三都如斯之。：又江戸ハ三衣袋（施米・施銭を納める袋）ヲ掛ズ、空餛ヲ挟マス（京坂は、「帯ノ背ニ、尺八ノ空餛ヲ挟ミ垂シ、別二袋ニ納タル尺八ヲ、刀ノ如ク腰ニサシ、：」とあるのに対していう）。別笛ヲ腰ニス（ル）ハ上（レ）同也。衣服モ亦、上同ト雖ドモ、裾フキ多く綿厚ク、女服ノ如クシ、又女用ノ如キ緋チリメンノ、長襦袢ヲ着ス多シ。丸糸ノ帯ヲ前ニ、大形ニ結ビ黒漆ノ下駄ヲハク。」（一 一一四～五頁）とある。濮は、尺八の袋については異なるが、服装や履物については、この説明とほぼ一致している。

濛 鐘鑄（かねい）の勸進

本文 鐘（かね）建立（こんりつ）も烟管（きせる）の大頭（ひざら）よりなる。「春」の部

解説 『日本国語大辞典』に、「寺の鐘を鑄造するために寄付金など

を募集すること」。濛では、「釣鐘建立」と書かれた職を持った僧が先頭に立ち、後に鐘の張りぼて（本報告書、小島氏稿）が続く。舟木本『洛中洛外図屏風』に描かれた図では、七人の僧が経文を朗誦して勸進、柄杓で喜捨を受け取っており、一人の僧が、鐘の形を大書したプラカード様のもの（小島氏）を担いでいる（『洛中洛外図舟木本 町のにぎわいが聞こえる』、小学館、二〇〇一、八二頁）。『人倫訓蒙図彙・七』にも図と説明があり（二六四頁）、「当世売僧（まいす）のてだてとして、遠郷他国の寺号を名のりて、鑄もせざる鐘鑄のすゝめ、文匣（ぶんこ）のふたに古釘、古金をいれて持もあり。紙につりがねを繋ぎ、竹にはりて、たからかにいひめぐる也。」の部分から、騙りの手段として用いられたことと、「プラカード様のもの」がどう作られたかが分かる。

本文は、「ちりつもりて山となる」（日本書誌学大系⁵⁹ 俚諺大成）、青裳堂書店、一九八九）の意だが、京伝は『古今和歌集』仮名序「高き山も麓のちりひぢよりなりて」を踏まえ、煙管の火皿の部分釣鐘に見立てている。

瀉 米搗き

本文 米搗（こめつき）は汗をぬぐふて。路（みち）をおしへ。

解説 『角川古語大辞典』に、「玄米をうすでついで精白すること。また、それを職業とする人。搗屋（つきや）ともいう。江戸では禄米をとる武家や、また町家の注文により、うすを転がして早朝より赴き、きねを勢いよく振り下ろしてつく。これを拝搗（おがみつき）

という。…なお、上方ではふみうすを持ち運んで米をつき、拝搗はやらない。」とある。『近世職人尽絵詞』上巻に、米搗(上 13)、また、ふみうすを用いた米屋の精米の様子(同 14)が続けて描かれている。『熙代勝覧』(澤に前出)にも、「搗き米屋」として載る(一〇〇頁)。

本文は良く知られた川柳「米つきに所を聞ケは汗をふき」(『柳多留・初篇』)を踏まえる。また京伝は、「江戸ッ子」を定義して、「金の魚虎(しやちほこ)をにらんで、水道の水を産湯に浴(あび)て、御膝元に生れ出ては、拝搗の米を喰(くら)つて、乳母(おんば)日傘(からかさ)にて長(ひととなり)」(『通言総籙』、天明七年 一七八七 刊)という。

瀧 未詳

本作の本文、また上に申し述べてきたような文献・画証に徴しても、うまく合致するものが見当たらない。ご教示を乞う。

濺 とつきたり・御釈迦の誕生

本文 仏生会(ふつしやうえ)のまつけとて。卯(う)の花新茶(しんちや)をひさき。

解説 『守貞漫稿・二十七』「四月八日 灌仏会」の項に、「三都トモ、諸所ノ仏寺ニテ花御堂ヲ作り、誕生仏ニ甘茶ヲソ、グコト也。…今世、江戸今日、卯ノ花ヲ売レドモ、門戸ニ挟ムヲ見ズ。専ラ仏前ニ供スノミ。」(四 一 一四頁)とある。花咲一男『絵本江戸の乞食

芸人』(前出)に「四月八日の灌仏会るとき、願人坊主が片手に岡持型の桶の中に釈迦の裸像を立てたのを下げ、他の手に開いた扇を持って「とつきたり、御釈迦〜」と呼び、各戸を廻って銭を乞うたもの。」と解説し、典拠として、菱川師宣画『月次のあそび』(元禄四年 一六九一 刊)、また川柳・雑俳をあげる(一一七〜九頁)。「とつきたり(御釈迦の誕生)」は、本文とは直接対応しないが、濺で、釈迦像の上方に飾られているのは、「卯(う)の花」であろう。ただし、この頃出荷された新茶を「卯(う)の花新茶(しんちや)」と称するかどうかは、他に用例が見当たらない。

瀑 鯉売り

本文 松魚(かつを)売のいかめしき声(こへ)は。貧人(ひんじん)の耳(みみ)にとゞろく。

解説 『守貞漫稿・二十七』「四月一日」の項に、「今日以後、初漁ノ松魚ヲ、江戸ニテ八特賞(レ)之、目テ松魚ト云、或ハ鯉ノ字ヲ用フ。トモニカツヲト訓ズ。先年八一尾価二、三両トス。近年漸賞之コト薄キ歟、価金一、二分ニ過ズ。」(四 一 一四頁)とする。

本文の「貧人の耳にとゞろく」は、初鯉の値段が法外だったことを踏まえる。また『日本国語大辞典』が用例として引く『塵塚談・上』に、「松魚売杯は鑿客の形氣にして…雑言を吐ちらし」とあるような風俗を、「いかめしき声」と形容しているのである。

また、初鯉は北尾重政画の風俗絵本『絵本世都(よつ)の時』(安永四年 一七七五 刊)・『絵本吾妻挾(からげ)』(天明六年 一七

八六 刊)にも、前者は担い売り、後者は魚屋の店頭風景として描かれるが、共に牡丹と取り合わせられている。

瀧 杜若・燕子花(かきつばた)

本文 … 牡丹(ぼたん)。燕子花(かきつばた)など。おのがさま
〜持(もち)出して売あたふれば。

解説 先頭に行く女性が、訪問先への贈答に、生けた燕子花(根元
のあたりで結わえ、札様のものが付いている)を持って行くものか。
あるいは花生けごとどこかで求めたものか。供の者が左手に持つ箱
との関係未詳。

2. 夏 五月

瀏 上り膏(あがりかぶと 飾り兜)

本文 端午(たんご)もいたれば。人家(じんか)みな。粽(ちま
き)。柏餅(かしわもち)をつくり。菖蒲刀(あやめだち)。上り膏
(かぶと)をかざる。

解説 『日本国語大辞典』に、「五月の節句に飾る紙製の兜」。『守貞
漫稿・二十七』「飾甲」の項に、「今世ノ飾り鎧兜、其製金革ヲ用ヒ
ズ。厚紙ヲ重ネ張り、…粗製ハ、紙張ノ表ニ、緋縮緬等ヲ張り製ス
モアリ。…江戸粗製多シ。」(四 一一五頁)とある。また『骨董集』
上編上之巻前「甞人形六」・上編下之巻中「端午の頭巾(ときん)」、
袈裟、小人形」の両項に、近世前期における端午の節句の子供風俗
を扱う。

瀧 菖蒲(しょうぶ)打ち・菖蒲太刀(あやめだち・しょうぶがたな)
本文 瀏に同じ。

解説 「菖蒲打ち」は、『角川古語大辞典』に、「五月五日の端午の節
句の日に、子供たちが菖蒲の葉を編んで太い縄状にしたもので地上
を打ち回って遊ぶ。」とし、柳亭種彦『用捨箱・中』(天保二年一
八四一 刊)、『嬉遊笑覧・六下』(文政三年 一八三〇 序)を引
いて解説する。前者は享保頃(一七一六〜三五)のこと、『中古風俗
志』明和元年(一七六四)老人筆記)、後者は寛政初年(一七九〇
前後)の実見とするが、瀧は、それよりもやや下った頃の例とい
うことになる。

「菖蒲太刀」は、『守貞漫稿・二十七』「菖蒲刀(シャウブカタナ)
の項に、「端午ノ飾刀ニテ、親族出生ノ男子等送之。木刀也。金銀紙
等ヲ飾之。」とあり、図を載せる。『角川古語大辞典』は、「年中行事
絵巻」・『日次紀事・五月』を引き、近世前期以前の風俗にも言及し
ている。

瀧 日傘(ひがらかさ)

本文 廬橋(はなたちばな)の袖(そで)の香(か)に日傘(ひが
らかさ)のうちをさしのぞき。

解説 『守貞漫稿・二十九』「笠」に、「今世、三都トモ婦女旅行ニ非
レバ、笠ヲ用ヒズ。市中二八、晴雨トモニ、傘、日傘ヲ用フ。」(四
一一四頁)とある。『同・三十』「傘履」に、「日傘ハ、傘有テ
而後日傘アリ。古来、青紙張り也。或云、寛保以来必ズ、青紙張り

也云々。然ハ、其以前ハ他色アル歟。或云曰、宝曆以来、青紙張行ル。」として、大坂・江戸に幾度か禁令の出たことを記し、「江戸ハ、文政中、男子日傘ノ禁止アリテ、無（レ）用（レ）之。故ニ、官命ニ及バズ。」とある（以上、五九頁）。

扇子を開いた若い女性が、下女に日傘をさせ、丁稚に柏餅を持たせて親戚等を尋ねるところか。本文は、「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞするよみ人しらず」『古今和歌集』・三・夏）を踏まえ、恋の匂いがあるが、絵には反映されていない。

瀚 未 詳

従者を伴った修行者風の女性。 に対応するようにも思われるが未詳。ご教示を乞う。

漕 柏 餅

本文 瀏に同じ。

解説 『守貞漫稿・二十七』「粽并柏餅」の項に「京坂ニテハ、男児生レテ初ノ端午ニハ、親族及ビ智音ノ方ニ粽ヲ配リ、二年目ヨリハ、柏餅ヲ贈ルコト、上巳ノ菱餅ト載ノ如ニシ」。江戸ニテハ、初年ヨリ柏餅ヲ贈ル。三都トモ其製ハ、米ノ粉ヲネリテ、円形、扁平トナシ、二ツ折トナシ、間ニ砂糖入赤豆餡ヲ挟ミ、柏葉、大ナルハ一枚ヲ二ツ折ニシテ包之、小ナルハ二枚ヲ以テ包ミ蒸ス。江戸ニテハ、砂糖入味噌ヲ餡ニカヘ交ル也。赤豆餡ニハ柏葉表ヲ出シ、味噌ニハ裡ヲ出シテ、標トス。」（四一一六〜七頁）とあり、絵を添える。

漕は、瀧の供の丁稚がせつかくの柏餅を誤って路上に落としたところと見るべきである。すると、瀧の女性は甥の初節句を祝いに赴く途中か。

瀝 足駄（下駄）の歯入れ

本文 木履（あした）の歯（は）いれはつもる齡（よはひ）の青嵐（あをあらし）に。おのが歯（は）のこぼれしは補（おぎな）ひがた

く。解説 『守貞漫稿・六』「下駄歯入れ」の項に「下駄、足駄等ノ歯ノ減ジタルヲ、新歯ト刺カユル也。鑄カケ、磨師、歯入等、其形相相似タリ。故ニ、磨師ト下駄歯入ノ図ハ省略ス。」（一一七三頁）とあって、「鑄鉄師」のみ図が載る。

本文は、足駄の「歯」こぼれに、年取って自分の「歯」が落ちることと、青嵐（初夏に吹く強い風）によって木々の「葉」が落ちることを掛ける。

瀟 蚊帳売り

本文 蚊帳売（かやうり）の声（こゑ）すゞしくして。孝子（かうし）の膚（はだへ）をたすけ

解説 『守貞漫稿・六』「蚊帳売」の項に「近江ノ富賈ノ、江戸日本橋通一丁目等、其他諸坊ニ、出店ヲ構フ者アリ。専ラ、近江産ノ畳表蚊帳ノ類ヲ、売ル店也。此店ヨリ、手代ヲ売人ニ市街ヲ巡ラシム。婿ハ、雇夫ヲ以テ担（レ）之也。其扮、図ノ如ク、二人ノ菅笠、雇

夫ノ半天、及、蚊帳ヲ納ル紙張ノ籠、トモニ、必ズ新製ヲ用フ。又、此雇二八、専ラ美声ノ者ヲ扱フ。雇夫、数日習(レ)之テ、後ニ為(レ)之。売詞「萌木ノカヤア」。僅ノ短語ヲ、一唱スルノ間ニ、大略半町ヲ緩歩ス。声長ク呼ブコト、如此也。」(一 二〇四頁)と詳しく解説し、図を載せる。

『近世職人尽絵詞』(下 3)にも描かれるが、共に口を開けており、売り声特徴的だったことが分かる。本文にも蚊帳売りの声が涼を呼ぶと記される。

本文の「孝子の膚」は、『二十四孝』に載る、呉孟が裸になって我が身を蚊に喰わせ、親を守った故事。

瀟「通行人」

本文 三伏(さんぷく)の暑さをうれひて。人も炎(ほのお)をはくがごとく。

解説 瀟に対応させて、男性の通行人を描いたものであろう。被っているのは菅笠。『守貞漫稿・二十九』「笠」に、「今世、三都トモ、土民旅行二八菅笠ヲ用フ。形、種々アリ。或ハ、人品二心テ用(レ)之、或ハ、随意用(レ)之。」(四 二一四頁)として五種類の図を載せる。

本文の「三伏」は、六月の暑さの最も厳しい時期をいうが、瀟も着物の襟元、裾をややはだけ、懐からは汗を拭く手拭いか懐紙が覗いて、辛そうである。

瀾 貸本屋

本文 うちつゞく五月雨(さみたれ)に。人皆徒然(つれづれ)なるを。見ぬ世の人を友とする貸本屋(かしぼんや)。もろくくの書(ふみ)をもち来て慰(なぐさ)め。

解説 『角川古語大辞典』に「読者を予想して書物を蓄え、これを日限を定めて貸し出し、一定の見料(貸し出し料金)を取る職業。江戸中期以後にはほぼ全国で営業し、娯楽読物文学の普及・制作、また、大衆文化の形成に大きな役割を果たした。」と解説し、以下発生源・業態等について詳述する。

また、『守貞漫稿・六』「小間物売」の項に図を載せた上で、「因云、貸本屋ノ包ミモ似(レ)之タリ。蓋、貸本八、路上ヲ呼ビ巡ラズ、得意ノ家ヲ巡ルノミ。雇銭ヲ以テ、諸書ヲ月貸ニスル也。此月銭ヲ、賃貸或ハ損料トモ云。又、三都トモニ、小間物ヤ貸本ヤノ扮、異ナルコトナキ也。」(一 一八〇頁)とする。

本文は、『徒然草』第十三段の「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよのうなぐさむわざなる。」を踏まえ、ただし、瀾は、雨中の伽ではなく、扇をかざし、暑い日避けながらの得意先回りであろう。

瀾 樋竹(といたけ)売り

本文 樋竹売(とひたけうり)のながくしき呼声(よびこへ)は。たゆみて雷(あまだれ)びやうしなり。

解説 『守貞漫稿・六』「竿竹売」の項に「衣服ヲ洗ヒ曝ス竹竿ヲ売

ル。故ニ、四時売(レ)之ト雖ドモ、特ニ夏ヲ專トス。又、夏月八、ナヒ竹ノ竿ヲモ売り、詞ニ「カタビラザホ〜ト云」。坐辺ニ掛(レ)之テ、夏衣ノ汗ヲ晒スニ用フ。又、樋竹ヲモ売リ来ル。乃チ、担(軒カ)架(レ)之テ、雨滴ヲ受ル具也。俗ニ、トユダケ、或ハ、トヒダケトモ云。竿売、樋竹売、トモニ、肩ニシテ巡ル。」(一 一八三頁)とある。

本文は、一定せず、高低の定まらない樋竹売りの呼び声を、「雨垂れ拍子」に例えるのであろう。二つ切りの竹竿のたわんだイメージと、「雨滴ヲ受ル具」であることを受けた表現。瀾では、注文を受けた時に使う工具も、竹と一緒に束ねてある。

瀾 「履物売り」

この職業を立頂した文献を見出していないが、様々な履物の担い売りということ、いちおう「履物売り」と命名し、なおご教示を乞う。

3. 夏 六月

瀾 富士詣(もつで)

解説 『守貞漫稿・二十七』に、「五月晦日、六月朔日ノ両日、江戸浅草、駒込、高田、深川、目黒、四ツ谷、茅場町、下野(谷)小野照 以上八所トモニ江戸ノ地名也。並ニ富士山ヲ模造シテ、浅間ノ神ヲ祭レリ。平日ハ、此摸山ニ登ルコトヲ聴(許)サズ。此両日ノミ、詣人ヲ登ス。蓋、駒込ヲ江戸ノ本所トス。等ノ富士詣テト号テ、

群参ス。各所、必ラス麦藁制ノ蛇形ヲ、生杉枝ニ繞ヒタルヲ売ルニ、大小アルトモ皆同制也。富士詣人ノ方物トス。…」とあり、「麦藁制ノ蛇形」を二種載せる(四 一一八頁)。

瀾の母子は、その帰りがけ。縁起物の蛇を担いだ男子の髪型は、笠を被っているので分かりにくくはあるが、『守貞漫稿・二十七』(同頁)に引用する『塵塚談』の、「予、若年ノ比ハ、俗間ノ童子等、参詣ニハ皆、髪ヲアラヒ、油元結ヲ用ヒズ、散髪ニシテ詣デシガ多カリシ。」という出で立ちを踏襲するか。なお、母親の持つ網状の袋は、『絵本吾妻挾』(瀑に前出)のも見られるが、何が入っているのか未詳。

灣 枇杷葉湯(びわようとう) 売り

解説 『角川古語大辞典』に、「枇杷の葉を乾燥して細かく刻み、甘味を加えて煎じた汁。…夏のものであるから、暑気あたりに効果があると考えられていたのであろう。京都烏丸が元祖であるが、江戸でも馬喰町三丁目山口屋又三郎が販売した。天秤で担いで行商もする。」とある。また『守貞漫稿・六』に、「和中散」に次いで、「是亦、消暑ノ散薬也。京師、烏丸ノ薬店ヲ本トス。三都、皆称(レ)之。又、三都同扮。蓋、京坂ハ巡リ売ルヲ專トシ、江戸ハ、橋上等ニ担筥ヲ居(据)テ、息ヒ売ヲ專トス。」(一 一八九頁)ともいう。灣と共に、『近世職人尽絵詞』(下 3)の絵も担い売りとして描かれている。

炙 未詳

瀛にも引用した『守貞漫稿・二十九』「今世、三都トモ婦女旅行ニ非レバ、笠ヲ用ヒズ。市中ニハ、晴雨トモニ、傘、日傘ヲ用フ。」(四二三四頁 実際『四季交加』に図示された他の女性は笠を被っていない。)の一文からすれば、と炙の女性には何か曰くがあるように思われるが、未詳。ことに、炙は笠を被ったまま日傘を差し掛けられている。

炒 扇売り

本文 街(ちまた)をゆく扇売(あぶぎつり)は風をうらんと想(おも)ふ。

解説 曲亭馬琴(瀧澤解)『燕石雜志・三』(文化八年 一八一 刊)「九 わがをる町」に「…扇売りは三十年以前までありけり。…扇売りは地紙(チガミ)の形(カタ)したる箱をかさねて肩にし毎夏(ナツゴト)に巷路(コウチ)を呼びあるき、買(カハ)んといふ人あればその好みに任じ即坐に是を折て出しき。只今三十以下の人はかゝる事をもしらざるべけれ。」とあり、『守貞漫稿・六』(一 二〇八頁)に引用する。また『同・六』に「扇子ノ古骨等ヲ出シ求(レ)之ニ、即時地紙ヲ折テ合(二)製之(一)也。」(一 一六四頁)とある。

炯 わい／＼天王

本報告書所載の荻野夏木氏 道行く宗教者 わい／＼天王と願人

をご覧いただきたい。

炯 水売り(冷や水売り)

本文 水うりの声(こゑ)ひや／＼かにして。清水(しみず)にちかき柳蔭に居(お)るがごとし。

解説 『守貞漫稿・六』「冷水売」の項に、「夏月、清冷ノ泉ヲ汲ミ、白糖ト寒晒粉ノ団トヲ加へ、一碗四文ニ売ル。応(レ)求テ八文、十二文ニモ売ハ、糖ヲ多ク加フ也。売詞、ヒヤツコヒ／＼ト云。」(一九七／＼八頁)とあり、図を載せる。

本文の「清水にちかき柳蔭」は、「道の辺に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ 西行法師」(『新古今和歌集・三・夏』)を踏まえるが、炯の荷には、「瀧水」と書かれている。

炬 医師乗物(医者駕籠)

解説 『守貞漫稿・後集卷之三』「江戸医師乗物」の項に、「座巻ナレドモ、聊力小形ニテ、上特ニ狭ク、唯軽キヲ旨トス。又、窓八常ノ大サナレドモ、簾ヲ長クスルハ、立派ヲ好ム也。…江戸ハ、官医刺(剃)髪ニテ、法印、法眼ニ任ジ、十徳ヲ着シ、平日ハ羽織也。故ニ、乗物ヲ狭クス。江戸、官医ニ非ルモ、皆学之。」とし、「追書、茲ニ、医師乗物ト書タレドモ、ノリ物トハ云ズ、形乗物ナレドモ、医者駕籠ト云也。唯、官医ニハノリモノ、町医ニカゴト云ヲ、惣テノリモノト云ハ、非歟、是歟。」とあって、絵を添える(五 一二六／＼七頁)。

炬は、角度のせいか、上部が狭まっているようには見えない。風を入れるために、簾は巻き上げられ、眼鏡をかけた医師の姿が見える。担ぐ従僕は「黒鴨」仕立て、挟み箱持ちも同じ服装である。「黒鴨」については、『守貞漫稿・十四』「男服」に「江戸、随従ノ僕八、合羽等ヲ着セズ、無記号ノ紺綿服ヲ着シ、股引、脚半、紺足袋トモ二用（レ）之。麻裏、草履等ヲハキ、銅具ノ脇指ヲ挟ム。紺服ヲ着ス。故二号テ、黒鴨ト云。蓋、市民ノ内、御用達及名主、或ハ官吏、又豪賈ノ従僕等、此扮也。」（二二四二頁）とある。

炸牛車

本文 夕立（ゆふだち）の牛車（うしくるま）は牛（うし）をかくす夏木立（なつこだち）をたづね。

解説 『江戸名所図会・一』に「高輪牛町」の図が載り（前掲、一

三二一丁三頁）、同「牛小屋」の項に「牛町にあり…牛を畜（きゆう）する家多く、牛の数一千足に余れり。養ふところの牛、額小さく、その角（つの）後に靡（なび）きたるを藪覆（やぶくぐり）と号（なづ）けて、上品なり。すべて牛は、行くこと正しく、ことに早し。形婉（たを）やかにして精気撓（たわ）まず、力量勝れたるに、軛（くびき）をかけ、重きを乗せて遠きに運ぶ。人の用を助くること、その功まことに少なからず。古（いにし）へは、淀・鳥羽にのみありて、都の外には牛車なかりしに、御入国の頃より許宥（きよゆう）ありて、江戸にもこれを用ゆることとなれり。余は、駿河にあるのみにて、ただこの三ヶ所に限れりとぞ。」（一一三一一

頁）と詳述する。

また、『活気にあふれた江戸の町 『熙代勝覧』の日本橋』（前掲）に、「江戸の町は、大名屋敷や寺社が高台にあつて坂が多く、大きな橋には反（そ）りがあつた。そこで、材木や石材、大量の米俵など、重いものは牛車で運んだ。武家の乗り物である馬には、基本的に物を引かせることはしないが、遠路の米の運搬や人を運ぶことはあつた。大八車は坂や橋の多い江戸市中で重い荷を運ぶのに重宝で、人が引いたり、牛に引かせたりした。」（九九頁）と平易に解説している。

本文は、夕立に牛を濡らさない配慮だが、炸では、米俵を引く牛の背中に、屋根のように日除けを被せている。

まとめ

正月～六月の挿絵五七ヶ所についての解説をいちおう終えて思うことは、印象批評ではなく文献を根拠にして絵の読みを示そうとした時に、その内容を過不足なく説明した文献が、『四季交加』以前にはごく少ないということである。ご覧になって分かるように、ほとんどの項目を『守貞漫稿』がカバーしている。これは、必ずしも無精をしたためではなく、最も適切な説明を文献に求めた結果、自然にそうなったのである。『守貞漫稿』は、幕末期の成立であるが、『近世奇跡考』・『骨董集』を含め、それ以前の信頼すべき考証は、進んで取り入れる姿勢を示している。つまり、現在目の前にある風俗を絵に描き、また言葉できちんと説明した上で、その根拠を過去に

遊って追求しようという風俗考証の姿勢は、同じモノを見聞きしながら、京伝以前にはほとんど見られなかったということである（先行する例としては、京伝も引用することのある菊岡沾涼『近代世事談（本朝世事談綺）』享保十九年（一七三四）くらいだろつか）。

『四季交加』は、風俗考証のものではないが、風俗絵本としても、きわめてユニークなものと言えよう。改めて、本作の特徴を列挙してみる。

1. 江戸 という大都市の繁華を描く意図を持ったものであること。ただし、「はじめに」にも述べたように、京橋銀座一丁目にあつた自らの店（京伝店）を視点として眺めた大通りの景観としている点が、通常の景観図・市街図・名所図と大きく異なる。

2. 江戸 の春夏秋冬を描こうとする点に、初期洛中洛外図屏風の持つ「月次風俗図の性格」（本報告書、小島氏稿）の継承が見られること。

3. 「職人尽絵」の要素を持つこと。ただし、従来の「職人尽絵」が多く歌合・狂歌合・職人部類（『人倫訓蒙図彙』前掲、橘岷江画『彩画職人部類』天明四年（一七八四）刊 など）の型の中で、いわば一職一図として描かれることが多いのに対して、本作では、大道を行く群衆の一人として描かれている点が異なる。

4. 3から必然的に導き出されることだが、本作では、通りの左右に店を構えた職（商）人は描かれない。代わって、零細な担い売りや下級の宗教者・芸能者が多く登場してくる。

以上、1～4の特徴のうち1～3は、江戸 と 京都 との違いは

あるものの、洛中洛外図屏風の「第二定型（江戸前期）」（小島氏前掲書、図録『西のみやこ 東のみやこ 描かれた中・近世都市』、国立歴史民俗博物館、二〇〇七・三）に連なるものであり、4は、「はじめに」で触れたように、京伝が初期の「職人歌合」等を資料として、その淵源を追求している事柄である。

洛中洛外図屏風と『四季交加』を結ぶ線は、私にとって、まだ十分に太いものになってくれているのではないのであるが、現在理解し得たところを述べてみた。

最後にもう一点、『四季交加』以後について触れておきたい。本作の直後、文化三年（一八〇六）頃に成立したとされる絵巻（三巻）に、鍬形蕙斎画『近世職人尽絵詞』（前掲『江戸職人づくし』）がある。老中首座を退任後、松平定信が発注し、上巻・大田南畝、中巻・手柄岡持（朋誠堂喜三）、秋田藩士平沢平格）、下巻・山東京伝が詞書を担当している。本絵巻（肉筆）は、近世「職人尽絵」の代表作とされるものであるが、私は、本絵巻には、『四季交加』の影響があるものと考えている。これも理由を列挙しておく。

ア. 本絵巻の絵師である鍬形蕙斎（北尾政美）は、この時津山藩の御抱絵師ではあるが、京伝の弟子であり、京伝にとっては大先輩にあたる南畝・岡持に加え、外ならぬ京伝自身が詞書を記している（定信からの指名であろう）。

イ. 三名の詞書は初期「職人歌合」のそれを意識して記したものと
思われ、ことに京伝の詞書のうち、「てまりにてさつ」といった記し方は、「候」の中世口語的用の摸倣と言って良い。

ウ、『四季交加』は、墨摺りの版本ながら、「見開きを上下二段に分け」（前掲『日本古典文学大辞典』、鈴木重三氏解説）て描いており、これを切り離して、十二月月をつなぎ合わせれば、江戸の四季絵巻になるであろう。この点は、（四季絵巻ではないが）『近世職人尽絵詞』の絵巻物としての発想に、大きな影響を与えたものと考えられる（ウについては、井田太郎氏『国文研助教 からご教示いただいた。厚く御礼申し上げます。』）。

また『近世職人尽絵詞』と同時期成立の絵巻『熙代勝覧』（文化二年頃成、ベルリン東洋美術館蔵、前掲）には、日本橋通りが俯瞰されており、前掲『活気にあふれた江戸の町』『熙代勝覧』の日本橋解説（小林忠氏、一二二―七頁）では、『四季交加』を引きながら、画者を京伝に擬しておられる。私は、この見解にはにわかに賛同できないが、『四季交加』は、『熙代勝覧』の成立にも影響したのではないかとの思いを強く抱いている。

要するに、『四季交加』は、風俗考証の成果と併せ、以後 江戸を描こうとする人たちにとっての規範のひとつになったものではなからうか。平成二十一年一月の研究会で荻野夏木氏が発表した際の資料に、斎藤幸雄・幸孝・幸成編著、長谷川雪旦画『江戸名所図会・一』（天保七年 一八三六 刊）「金六町 しがらき茶店」（一・二二〇―二二一頁）の図に描かれた「わいわい天王」を紹介しているが、『江戸名所図会』の絵師雪旦が、『四季交加』焔を踏まえたことは、一目瞭然である。さらに、その隣りに入る枇杷葉湯売りは、これもはつきりと灣に基づいている。『四季交加』が、『江戸名所図会』をはじめ、京伝にとって後進にあたる人々に、重要な資料・粉本として利用されたことについては、今後の課題として取り組みたいと考えている。その際、中村康夫氏収集の『名所図会 コレクション』及びこれに基づくデータベースから、様々な示唆の得られることを期待している。

洛中洛外図屏風から風俗画と地誌へ

日本歴史研究専攻（教員） 小島 道 裕

はじめに

今回の研究会「中世・近世の地誌と風俗」では、歴史学と文学の接点に位置する素材として、山東京伝と北尾重政が江戸市中の月次風俗を描いた『四季交加』をテキストとして講読すると共に、国立歴史民俗博物館（以下歴博）が所蔵する洛中洛外図屏風などの資料についても検討を行ってきた。

歴博では、二〇一二年春に、館蔵の洛中洛外図屏風を中心とした企画展示を予定しており、またこの研究会をきっかけに、さらに国文学研究資料館の所蔵資料や展示施設も活用した連携展示に発展させることも計画しているが、実際の所、洛中洛外図屏風と地誌や風俗画は、密接なつながりをもつ存在である。

洛中洛外図屏風は、非常に多くの要素を含み込んだ総合的な絵画であり、さまざまな分野の作品を生み出していく「グレートマザー」とも言われる。以下、風俗の問題と名所の問題に分けて、その展開について多少の考察を行ってみたい。

1 風俗を描く指向

月次風俗図としてのつながり

洛中洛外図屏風と『四季交加』の関係に気づいたのは、三月の図に配された二羽の鶏である（本報告書注釈図の遷）。共に鶏冠のある雄鳥であり、睨み合うポーズから見て、おそらく本来は鬪鶏の場面に描かれていた鶏と思われる。本文には関連する記述がないため、文を説明する指図としてではなく、単に絵として三月にふさわしいものとして描き加えられたと考えられるのだが、なぜ三月に鶏なのかは、洛中洛外図屏風から考えれば説明が付く。すなわち、洛中洛外図屏風は月次風俗図の性格を持っていたため、特に初期の洛中洛外図屏風は、月毎の行事や風物を意識的に描き込んでいる。そして、三月の場面に好んで用いられたのが、宮中の三月三日の節句行事であった鬪鶏（鶏合わせ）であり、たとえば、「歴博甲本」（図1）と「上杉本」では斯波邸に描かれ、東博模本では本来の宮中での鶏合わせが描かれている。「歴博甲本」と「東博模本」で鶏合わせが描かれている画面は、共に右隻第四扇、すなわち左から数えると三扇目、つまり「三月」に相当する部分であり、「上杉本」では画面上での季節の展開が早いために、右隻第六扇すなわち本来「一月」相当の部分にずれ込んでいるが、鶏合わせが描かれたのは、本来三月の風物としての意味であったことは間違いない。



図1 洛中洛外図屏風に見られる闘鶏「洛中洛外図屏風歴博甲本」斯波邸の場面。国立歴史民俗博物館蔵)

近世の洛中洛外図屏

風になると、このような季節性は希薄になることが多い。月次風俗を描いた絵画はあるが、三月の場面は通常「花見」として描かれるように、鶏合わせは「歴博D本」等に見えるが例は少ない。しかし、画家の間では、それが知識や粉本として伝わっていたことを、この『四季交加』に現れた鶏から

やはり絵画の伝統として描かれたものではないだろうか。

絵の中だけでなく、実際の風俗として続いてきたものも、もちろん『四季交加』の中には散見される。歳末に現れて祝詞を述べる節季候は、一五四〇年代ころの作品である「東博模本」に見える覆面姿の二人連れ二組（細川典厩邸、南の御所）が初見と思われ、「上杉本」では、裏白のかぶり物を頭に載せた、より近世に近い物になる。

『四季交加』では、正月の最初の画像として登場する三河万歳は、洛中洛外図屏風では、管見の例では江戸中期の「歴博E本」（山崎の場面）に見えているが、日本の画像は、名所案内記『京童』の挿絵からの引用であることが、岩崎均史によって指摘されている。また、同じく正月の場面に描かれた猿回しは、「歴博甲本」以来、洛中洛外図屏風には頻出する画題である。

鐘勸進の姿は、舟木本にプラカード状の鐘の絵を掲げる一行が描かれているのが有名だが、先述の「江戸名所図会」にも同じような図柄がある。『四季交加』では、張りぼてと思われる鐘を車に載せて歩く図像が、なぜか四月の場面にあるが、実際に季節と関係があるのかは未詳である。

人間を描く絵としてのつながり

『四季交加』は、道行く人々を描くのみで、背景は描かれていない。関心は完全に人間、すなわちさまざまな生業の姿を描くことにあり、洛中洛外図屏風のように、風景の中に人間が描かれている描き方と

うかがうことができる。この鶏は、実際に三月の江戸市中で闘鶏が行われていたという意味ではないと思われるし、闘鶏を行う人物は描かれていないから、正確には闘鶏と言えるものでもない。しかしそれにも関わらずこのような絵が描かれることに、室町期の洛中洛外図屏風ないしさらに古い月次風俗図からの長い連環を感じ取ることは、誤りではないだろう。

なお、江戸初期の江戸を描いた絵画として著名な「江戸名所屏風」（出光美術館蔵）の中にも、少年たちが闘鶏を行う場面が描かれている（左隻第一扇）。月次風俗としての意味はすでに失われているが、

は大きな違いがある。この両者の間をどのように埋めていったらよ
いだろうか。

ひとつの手がかりとして、東京国立博物館所蔵の「観楓図屏風」を
取り上げてみたい。



図2 遊楽図の元となる嵯峨野の月見場面（「洛中洛外図屏風歴博甲本」国立歴史民俗博物館蔵）

（図は、東京国立博物館
ホームページの写真
データベースなどで閲
覧できる）

六曲一隻に紅葉狩り
を楽しむ男女それぞれ
の二団が配され、背景
には神護寺などが描か
れることから、場所は
高尾と考えられている。
作者は、落款の印から、
狩野元信の次男とされ
る狩野秀頼であること
が分かり、時代は室町
末期と推定される。

これまでおそらく指

摘されていないが、この絵は、歴博甲本を下敷きにして作られてい
る。歴博甲本の左隻第6扇と第5扇の上方、桂川の河辺で酒宴を行
う人々や渡月橋が描かれている付近がそれであり、この野外酒宴は、

実は嵯峨野の月見を表していると考えられる（図2）。

「観楓図屏風」の男性の二団では、歴博甲本のこの酒宴場面を元
に、酒をつがれる老人ではなく、踊りを踊る人物が中心になってい
る。そして、女性の二団は、さらにそれをほぼ左右対称の形で折り
返して作られている。きわめて人為的につくられた構図であること
がわかるが、そこで描こうとしたものは、おそらく人間そのものだ
ろう。画面には、老若男女僧俗という人間類型が余す所なく描かれ、
服装は華麗かつ細密に描かれており、まさに風俗そのものが画題で
ある。

場所は高尾で流れる川は清滝川とされるが、川に架かる橋の向こ
うに寺院があるという構図も、歴博甲本から借りてきた物に相違な
く、景色は後景に退いて、もはや主題とは言い難い。洛中洛外図屏
風が景色の中に人物を描いていたのに対して、人間を描くための場
所として風景が使われているのである。

題材とされている場所は京都の西、季節は秋・冬であるため、こ
れと対になるべき、東山の春の景色を描いたもう一隻の屏風が存在
したのではないかと、とする見方がある。洛中洛外図屏風の感覚で
は、そのような構成が当然考えられ、その可能性は否定できないが、
しかし、この隻のみでも人間類型は完結しており、景色は後景に過
ぎなくなっていることから見て、必ずしもそう考える必要はないと
も言えるだろう。

洛中洛外図屏風の中でも、南から見た特異な構図を取る「舟木本」
は、季節は「春夏」だけで「秋冬」の場面はなく、地理的にも、五



図3 「歴博F本」に描かれた職人と往来の人々（国立歴史民俗博物館蔵）

条通がいつのまにか二条通になるなど、「歴博甲本」のように都市の構造自体を描こうとする意図は弱く、描きたいのは、むしろ個々の場面と人間であると言える。構図の中心に来るのが島原の前身である六条三筋町であることも、そのことをよく示している。

地理的な関係よりも人間を重視するこの系統の方向性としては、職人尽絵を挙げることができよう。中世から、「職人歌合わせ絵巻」の系譜があるが、近世には、それを町並みの光景として描いた作品がある。国立歴

史民俗博物館が所蔵する「職人尽図巻」は、洛中洛外図屏風の町並みを借りながら、さまざまな職人を描こうとした作品と言え、そして、同じ作者ないし工房でそれを実際に洛中洛外図屏風として仕立て、どここの通りとも分らないままに横長の金雲で区切っているのが、「歴博F本」である。これには「法眼具慶筆」という落款がある。

住吉具慶が描いた「洛中洛外図巻」（東京国立博物館蔵）や「都鄙図巻」（興福院蔵）はこれに近似する作品であり、「歴博F本」も、具慶本人の筆とは思えないものの、何らかの系譜関係を引く工房の制作なのかもしれない。「歴博F本」と殆ど同じ構図の洛中洛外図屏風は、すでに4本を確認しており（武生公民館本、京都国立博物館編『都の形象』所載の個人蔵本、武田一九八八所載の京都府立山城郷土資料館寄託本、その他一点）、さらに類品と考えられるものも少なくない。現存の洛中洛外図屏風を最も多く描いていると言えるこの工房の問題については他日を記したいが、第二定型でありながら、人間や生業などを描く方向に向かっている洛中洛外図屏風の例として注意したい。

この他、江戸前期の「歴博D本」も、地理的な関係よりも、商家・職人を暖簾などで物尽くし的に描く傾向があることが注意される。

2 名所を描く指向として

人間への関心とは異なった方向性として挙げられるのは、名所を描く絵としての指向である。

江戸幕府による支配が安定すると、洛中洛外図屏風は、左隻は二条城を中心とする、いわゆる「第二定型」として定着する。以後の洛中洛外図屏風はほとんどがこの構図で描かれるが、傾向としては、町の部分は次第に簡略化され、名所部分の比重が高まっていく。

右隻（東隻）に関して言えば、「歴博甲本」では画面の上方に描かれていた鴨川が、位置を次第に下方に移していき、つまり東山の名

所が大きく描かれるようになって、町の描写はこれと反比例して簡略ないし抽象的になっていく。最終段階の「京都名所図屏風」では、鴨川は画面下端にまで移動し、洛中の町は全く描かれなくなるため、「洛中洛外図屏風」と呼ぶことができなくなる。

第二定型の屏風は、多かれ少なかれこのような傾向があり、町がほとんど、ないし全く描かれなくなったものは、「洛外名所図屏風」ないし、祇園社や北野社など特定の寺社を中心に描き分けることも多いことから、「洛東洛西名所図屏風」などと呼ぶのが適当である。

この傾向は、個別の名所や祭礼への関心の高まりから、江戸中期から地誌ないし名所案内記が刊行され出すことも平行した動きとということができよう。

洛中洛外図屏風で言えば、「歴博E本」は、仮名草子のひとつ「京童」(明暦四年 一六五八 刊)の挿絵を合成して作られたものであることが岩崎均史氏によって明らかにされている。都市全体を鳥瞰するのではなく、個々の名所を近くから見た、ないし訪問した際の目線で描かれており、実際にその場を訪れる人間の姿もよく描かれている。見る者と画中の人物を同一化する視点だろう。そのような訪れる立場からの地誌として、「名所図会」が盛んに刊行される近世後期への動きにつながるものと言えよう。

名所・祭礼だけを描いた作品の例としては、「洛中洛外祭礼風俗図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵、F-281-226)を挙げられる。京都の寺社や内裏での祭礼行事を一扇毎に描いたもので、対象となっているのは、上賀茂神社(競馬)、北野社、内裏(左義長)、嵯峨釈迦堂、愛

宕社、虚空蔵、稻荷社、三十三間堂、大仏、清水寺、祇園社、四条河原の芝居小屋である。

この屏風の内裏の場面は、正月行事の左義長であり、「歴博乙本」が描いているものと一致する。「歴博乙本」が、「歴博甲本」の描く小朝拝や、「上杉本」の描く節会のような古典的な主題ではなく、実際に当時盛んに行われていた左義長を描いていることは、政治権力を描く絵としてよりも、風俗図・名所祭礼図としての傾向がすでに現れていることを示している。

まとめ

以上、近世的都市の勃興と共に、一六世紀から描き始められた洛中洛外図屏風がたどった展開過程をまとめると、当面の整理としては、次のようになると思われる。

まず第一定型、すなわち室町幕府・細川邸と内裏という政治権力の拠点を中核としつつ、都市の全体を描こうとした絵が描かれる(「歴博甲本」「東博模本」「上杉本」「歴博乙本」。朝倉氏の一乗谷に代表されるような、地方の大名権力による新たな城下町の建設の際、規範として京都が意識されたという「外からの眼」と、応仁文明の乱後、近世へ向かう新たな都市として再生した京都への京都の住人自体の関心)。「内からの眼」がその背景と言えよう。そして、そこに含まれていた豊穡な要素は、内容別に次のように分化していく。

「権力者とその都市」の図

京都が政権の所在地でなくなつた後に、洛中洛外図屏風の持つていた「権力者とその都市」を描いた図としての性格を受け継いで、いくつかの屏風が描かれている。例としては、織田信長が狩野永徳に描かせた「安土図屏風」（パチカンに贈られたが現在所在不詳）、永徳の長男狩野光信が作者かとされる「聚楽第図屏風」（三井文庫蔵）、同じく狩野光信に比定される「肥前名護屋図屏風」（下絵ないし模本）（佐賀県立名護屋城博物館蔵）、作者未詳の「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館蔵）、そして政権所在地ではないが、「寛文長崎図屏風」（長崎歴史文化博物館蔵）までを挙げることができる。

このような都市の全景を描く屏風は、一六世紀から一七世紀半ばまでに顕著なものであり、都市を建設・再編・支配した権力者の視点が強くうかがえる。

風俗図

前述した「観楓図屏風」、「舟木本」など、洛中洛外図屏風の系譜に位置するが、そこにあった都市の全体を描く指向や季節性が希薄になり、人間そのものを描く指向が強くなる。都市全体を見渡そうとする権力者の視点ではなく、その中の個別の場面や、具体的な人間の生活への関心が前面に出て来たものと言えよう。近世中期には、「職人尽図巻」のように、都市景観の中に生業を描く方向の絵画が増えてくることも注意される。

第二定型の洛中洛外図屏風

多くの作品が残されており、「林原本（池田本）」、「歴博C本」、「歴博D本」、「歴博F本」などを例として挙げられる。

左隻に細川邸が配されていた第一定型から、「聚楽第図屏風」を経て、左隻の中心に二条城を描く構図として安定したものであり、江戸幕府による支配の安定化が背景だが、内容的には、先述の「歴博F本」、「歴博D本」のような風俗図的傾向や、町並みを簡略化し名所の比重を増す名所・祭礼図的な傾向も含まれる。

従つて、必ずしもその統治を主題にするわけではなく、統治者の視点からは忌避されるはずの喧嘩（刃傷沙汰）をあからさまに描く作品も稀ではない。そのような例のひとつである歴博D本は「豊国祭礼図屏風」の影響も見られ、「萬野美術館A本」は、はつきり舟木本の刃傷沙汰場面を取り込んでいる。「江戸名所図屏風」（出光美術館蔵）にも、舟木本の刃傷沙汰場面が取り込まれており、これらは、反秩序的傾向が顕著な舟木本ないし岩佐又兵衛の影響と思われる。

名所・祭礼図

洛中洛外図屏風は、次第に都市全体を描くことへの関心を失い、町の比重が下がって、個別の名所を大きく描くようになる。歴博が所蔵するものとしては、地誌の挿絵に基づき、「歴博E本」、すでに町並みを描かなくなった「京都名所図屏風」、名所と祭礼のみに特化した「洛中洛外祭礼風俗図屏風」などを挙げることができる。

長崎について付言すれば、「長崎諏訪神社祭礼図屏風」（国立歴史民俗

俗博物館蔵、江戸中期）が、「寛文長崎図屏風」のような都市の全景ではなく、祭礼（長崎くんち）のみを描く屏風となっていることも、この傾向として理解することができる。

近世中～後期には、都市社会が成熟し、室町末～江戸初期の、都市の建設・勃興とは異なった視点から、再び都市自体への新たな関心が広がっていった。広汎な旅行者の存在や、町人による「自らの都市」としての自覚が背景と思われ、そこに出てきたのが、個々の名所を詳細に描く名所図会などの詳細な地誌であったと言えるよう。

自らの都市としての江戸への賛歌である『四季交加』も、このような動きの延長線上に考えることができると思われる。

【参考文献】

網野善彦他『近世風俗図譜 12職人』小学館、一九八三年
岩崎均史『国立歴史民俗博物館蔵洛中洛外図屏風の考察』先行版本
挿絵との関係 『たばこと塩の博物館研究紀要』第七号、二〇〇〇年

川嶋将生「近世風俗絵画のなかの節季候」松本郁代・出光佐千子編『風俗絵画の文化学』思文閣出版、二〇〇九年

国立歴史民俗博物館『西のみやこ東のみやこ』描かれた中・近世都市 『（企画展示図録）二〇〇七年』

小島道裕『描かれた戦国の京都』洛中洛外図屏風を読む 『吉川弘文館、二〇〇九年』

榊原 悟「住吉具慶筆『都鄙図』解題」『古美術』第八八号、一九八八年

杉山美絵「描かれた禁裏の記憶」洛中洛外図屏風（歴博乙本）
日高薫・小島道裕編『歴史研究の最前線』vol.11 美術資料に歴史を読む 漆器と洛中洛外図 『総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館、二〇〇九年』

武田恒夫「洛中洛外図屏風の行方」『古美術』第八八号、一九八八年

内藤正人『江戸名所図屏風』大江戸劇場の幕が開く 『小学館アー

トセレクション』二〇〇三年

道行く宗教者 わいわい天王と願人

日本歴史研究専攻（院生） 荻野夏木

山東京伝『四季交加』の挿絵、六月の上段左端部分に、黒い羽織をまとうて天狗のように鼻の高い面を着けた人物が描かれている。手には扇子と札らしきものを持ち、周りの子どもたちとともに地面を踏みならし、軽快に踊っているような仕草である。

この人物は「わいわい天王」と呼ばれ、芸能者でもあり宗教者でもある。近世紀には路上にさまざまな宗教者が出現し、芸を見せたり札やお守りを買ったりした。彼らは芸の種類や売り物の別によってそれぞれの名称を持っていたが、総じて願人¹と称された。

『四季交加』の挿絵には願人がしばしば描かれているが、本文中には登場しないこともある。この稿ではわいわい天王を中心に、願人について述べてみたい。

（一）わいわい天王について

『四季交加』から四十年ほど後から書き始められた『守貞謾稿』(天保八年序)は、わいわい天王について、巻之七「雑業の部」にその格好、行動ともによくまとめて紹介している。

ある人云く、江戸大略文政前、貧巫すなはち神道者の所行ならん。その扮、猿田彦の仮面を着け、古き黒定紋付羽織、ならびに袴をはき、麿なる両刀を佩きたり。その詞に、わい／＼天王さわぐがおすき、云々。衆童追行のとき、紅摺りの牛頭天王小牌を散らす。紙牌なり。しかる后、毎戸に一銭を乞ふなり。この行、京坂になきなり。

猿田彦の仮面、黒の紋付羽織を身につけて刀を帯び、子どもたちに囃されて牛頭天王の札を誂く、という描写は、『四季交加』挿絵と一致する。またその素性も「貧巫すなはち神道者」と推定されている。文政前に江戸で見られた所行とあることから、『守貞謾稿』のこの部分が書かれたときにはすでにこの芸能は見られなくなっていたのだろつ。あるいは筆者の喜田川守貞自身も、伝聞だけで実際に目にしたことはなかったのかもしれない。なお、彼が江戸へ来たのは本人によれば天保八年のことである。

『江戸名所図会』(天保五年、七年)でも、わいわい天王は二カ所に登場する。一カ所は巻之一「金六町 しからき茶店」の店先で、もう一カ所は巻之七「下谷稻荷明神社」の門前町である。『四季交加』挿絵と同じように、いずれも路上で子どもたちを引き連れている。

「下谷稻荷明神社」では全体が遠景のため個々の人物の詳細までは見て取れないが、猿田彦の面と扇子を帯びていることがわかる。「しからき茶店」店先ではそれに加えて、黒い羽織と富士山の絵柄の扇子で札を撒いており、踊っている最中なのか片足をあげている。どちらの図でも、まわり子どもたちは楽しそうに囃している様子である。

これよりも時代が下る『守貞謾稿』によれば、すでに天保年間にはわいわい天王は見られなくなっていたことになるが、それは『守貞謾稿』が誤っているのか、あるいは『守貞謾稿』が正しく、『江戸名所図会』が当世そのままの写生ではなく、記憶を引き出して描かれたという可能性もある。

当世の風俗としてわいわい天王を記録したものに、『仙境異聞』（文政三年）がある。これは、天狗にさらわれて異界を旅して帰ってきたという少年寅吉に、平田篤胤が取材して記録した書であるが、わいわい天王について以下のようにふれられている。記述にある「我」とは、寅吉自身である。

…又或時の事なるが、七軒町の辺を謂ゆる、わい〜天王とて、鼻高く赤き面をかぶり袴を着し太刀をさし、赤き紙に天王と云ふ二字を摺りたる小札をまき散らして子共を集め、天王様は囃すがおすき、囃せや子ども、わい〜と囃せ、天王様は喧嘩がきらひ、喧嘩をするな間よく遊べ、と囃しつゝ行くを我も面白く、大勢の中に交りて共に囃して遠く家を離るゝ事も知らず…

この書が書かれた時期は、『守貞謾稿』でわいわい天王が見られたと指摘される時期とちょうど一致している。さらに、わいわい天王がもともと子どもを引き連れているのではなく、その場で遊んでいた子どもたちがわいわい天王についていったのだということもわかる。わいわい天王が現れるとまとわりついて囃したてるといいう行動が、この頃の江戸に住む子どもたちの習慣だったのだろう。

加えて、これらの史料からは「わいわい天王さわぐがおすき」とか「天王様は囃すがおすき、囃せや子ども、わいわいと囃せ」といった囃し文句のあったことが読み取れる。

さて、『守貞謾稿』には、わいわい天王が撒いていた札が牛頭天王の札であったとある。『仙境異聞』にはもっと詳しく、「赤き紙に天王と云ふ二字」が書かれたものと描写されている。牛頭天王をまつる神社で、現代でも最も代表的なのは京都の八坂神社であろう。その祭礼である祇園会が現在でも病気除けを掲げて催されているように、牛頭天王は除疫神すなわち病気を司る神という側面を持っている。

また、わいわい天王がまく札の色が赤いという点も、病気よけの呪具には赤が最も用いられることを想起させる²。祇園会で売られるちまぎにも、赤い紙があらわれている。さらに、子どもが囃すのも、日常的に病気よけのまじないを必要としたのが幼年層であったことと関係があるかもしれない。病気の中でも、とくに赤色の呪具が重用されたのは、幼い子どもが多くが一度は病む疱瘡であった³。

しかし、囃し文句や当時、後世からの説明を見るかぎり、わいわ

い天王がかならずしも病氣よけを声高に主張していたわけではなさそうだ。どの史料でも、あくまで子どもを引き連れて囃し立てるといふ芸能者の側面がクローズアップされている。

(二) わいわい天王の源流

『四季文加』よりも刊行が二十五年さかのぼる『教訓諭草 絵本花の縁』⁴(石川豊信画 宝暦一三年)にも、わいわい天王らしき人物が描かれる。この書は、当時の子どもたち向けに市中で見られるさまざまな風俗を描くもので、見開きの絵を中心に短い文章が添えられる体裁となっている。

この書物の下巻に、路上で札を撒きながら子どもたちとともに踊っている男が描かれる。添文は「鼻高う天皇様を売人は銭と米とがおすきわいわい」となっている。しかし、その装束と持ち物は前掲の史料と大きく異なっている。手にしているのは幣束で、黒羽織も身に着けていない。後世でのわいわい天王と外見で一致するのは、鼻の高い猿田彦の面だけである。さらに、この時点で「わいわい天王」と呼ばれていたのかも判断はできない。だが、これがわいわい天王を遊った姿であることは、文章からも明白である。また、この書が刊行された一八世紀後半から『仙境異聞』の頃の一九世紀前半までという長い年月の間、装束や持ち物は変わってもその芸能と機能すなわちその場にいた子どもたちを引き連れてはやし立て、「天皇様」のお札を配って周るといふ行動が受け継がれていたこともわ

かる。

ここまで紹介した史料は、どれもわいわい天王を単独の芸能としている。しかし、『嬉遊笑覧』(文政一三年序)では、わいわい天王かその類型が「まかしよ」とともに行動するものとして描写されている。「又法師の乞食に願人といふもの…」という文章で始まる一節である。

…寒中行衣を着頭を白布にてかつら巻にし、鐸を振て細かき絵紙を切たるを時ちらしながらありければ、童部多く付てこれを拾へり(割註)時けといふを子供らまかしよといふ故これが名をまかしよといへり。この絵を時しはそのまへに天狗の面を着たる社人、天王様の守とて小札をまきたり(割註)此事「事跡合考」に具さに出たり。「件のまかしよも寛政ころよりなくなりて、榛田稲荷の代参となり住吉踊などとなれり

これによれば、まかしよという行衣と白布のかぶりものをした下級宗教者が鐸をふりながら切った絵を撒き散らして歩き、その前を天狗の面をつけた社人が天王の札を撒いて歩く、いわば先導であるとされる。ここでは、まかしよが子どもたちに囃されるものとなっている。一方、わいわい天王という名は明記されておらず、天狗の面すなわち鼻の高い面以外の装束についても明らかではないが、鼻の高い面、天王の札という要素が揃っていることから、少なくともわいわい天王と類型のものとしていいだろう。また、これらが見ら

れた詳しい年代は明らかにされないが、まかしよが寛政頃にはなくなったとして、ことからそれ以前のこととして書かれていると考えられる。

ここに参考として挙げられている『事跡合考』（享保〜延享頃）の記事は、次の神田明神について記したものと思われる。筆者柏崎永以が人から伝え聞いた話として、神田明神の神主について、

六月彼社中鎮座の牛頭天王祭礼の催として、神田郷中廻り候時猿田彦の仮名（面）を三つから携へ幣を持って子ともにはやさせ赤紙の小符に牛頭天王と記したるをまきあたへ候と也、此風于今猶すたらず誠に古風残れり

とある。『嬉遊笑覧』では、前掲のまかしよとわいわい天王（天狗の面の社人）を並べた記事に参照元として『事跡合考』が挙げられていたが、『事跡合考』のほうではとくにまかしよについてはふれていないようである。

この『事跡合考』の記事は、今まで見てきたうちで最も古い時期に書かれた史料になる。猿田彦の面に幣を携えるという点は、『教訓諭草 絵本花の緑』の画と一致しており、これがわいわい天王の原型だったと推測できる。また、「神田郷中」を廻るとあるように、路上を歩きながらの芸能、子どもに囃したてられる、赤い札をまく、といった特徴が、この頃からのものだったこともわかる。

ここでわいわい天王のおおまかな流れについて整理してみると、

古くは神社の祭礼にも参加していたものが、後の『守貞謄稿』でも「貧巫」と言われるような下級宗教者へとその芸能をつつしていった、と考えられる。活動時期は遅くとも享保の頃から天保年間前後と比較的長い期間、その間に装束には多少の変遷が見られたものの、それ以外の様式については大きく変わらなかった。

しかし、神田明神での興行がわいわい天王の起源であるのか、それとも牛頭天王を祀る神社で共通して行なわれていた芸能だったのか。またその過程のいつの時点から「わいわい天王」と呼ばれるようになったのか。そもそも、どういった経緯でこの芸能が生まれたのか。こうした点はさらなる検討を要する。

なお『事跡合考』では、神田明神の神主による興行を六月祭礼の際のこととしている。『四季交加』でも、わいわい天王が描かれるのは六月の挿絵である。他の史料では、わいわい天王が一年のどの時期に現れるなどといったことにはほとんど言及していないが、牛頭天王の祭礼が行われるのが旧暦六月であることを考えると、実際の時期に集中してわいわい天王が現れたか、あるいは挿絵を担当した北尾重政が牛頭天王の祭礼を意識して六月に配置したのか、いずれにしてもわいわい天王が六月挿絵に登場することは偶然ではなく、明確な意味があると考えられる。

（三）願人坊主 まかしよと半田稻荷

今一度、『嬉遊笑覧』の周辺に立ち戻ってみたい。

わいわい天王をまかしよの先導であるとする『嬉遊笑覧』に対し、その他の史料、とくに寛政十年に刊行された『四季交加』の挿絵や、それをさらに遡る『教訓諭草 絵本花の緑』、『事跡合考』など実際にわいわい天王が活動していたと思われる時期の書物では、わいわい天王は単独のものとして描かれている。一方、『嬉遊笑覧』自体は書かれた時期が寛政からかなり下っているなど、当世の書物とは言えない⁵。だが、『守貞謾稿』の「まかしよ」という項目では、このように記述される。

ある人云ふ、わい／＼天王、同時願人の所行、その扮大坂金毘羅行人と同じく、白木綿行衣・手甲・脚半・甲掛同製、また白木綿を被る。その形突盛のごとく、両端の余を繩に捻ぢ、両耳の上に一輪をなし、その余二、三尺を垂る。ただ金毘羅行人と異なるは、三色のく／＼り猿を背に負ふとなり。唱ふ所、いまだこれを詳らかにせず。あるひは青面童子のだらに等かと云ふは、三猿を負へばなり。なほ後考すべし。これまた京坂になきなり。

ここでは、まかしよをわいわい天王らの行つものとしているようである。だが、その出で立ちは全身白布の行者姿とあり、わいわい天王のそれとは大きく異なる。とくに頭にかぶった白木綿が特徴であったのか、詳細に記されている。『嬉遊笑覧』でまかしよの衣装は行衣に「白木綿にてかつら巻」とされているのとはほぼ一致するが、持ち物や芸能については、こちらはく／＼り猿を背負って陀羅尼などを

唱えているなど、差異が見られる。

『嬉遊笑覧』にあるまかしよが絵をまくという行為について、『守貞謾稿』ではふれられていないが、『世のすがた』（天保四年）という、やはり江戸の風俗について紹介した随筆でくわしく述べられている。

寛政の末までおんぎやうとて、其形ち願人坊主にて、頭を白木綿にて行者包に結び、白き木綿の単物の短きを著し、下は白木綿にて女の下帯の如きものを結びて、くびへ大山不動明王と書し箱をかけ、手に鈴を持、足早に往来す、子供むらがりて、マカシヨ／＼といへば、墨摺の小き化物絵など七八枚まきちらして走り行、又錢をあたふれば其多少にしたがひて彩色摺の絵を出す、子供歡びて多く錢をあたふ、其絵多くは天満天神の像なり、又錢をあたへし門にて鈴を鳴らし何か唱へて過、十月の初より来り極寒に至りてやむ…

この記述では「おんぎやう」（御行か）と呼ばれてはいるが、こどもたちに「まかしよまかしよ」と囃したてられ絵をまくという特徴からすると、『嬉遊笑覧』と同じものを指しているともみていいだろう。ただ、『守貞謾稿』では行者姿に脚絆や手甲などいろいろいるなものを身につけているとあるのに対し、『世のすがた』が描写するところの「おんぎやう」は、上半身には短い単物、下半身ははつきりとはわからないが「女の下帯」のようなものを結んでいたとあることが

ら、かなり寒々しい格好であったらう。

絵については、墨一色の化け物絵を配り、彩色した天神絵を売るとしている。化物絵は子どもの玩具として親しまれ、天神は学問の神であることから子どもと縁が深い。わいわい天王の場合も含め、こうした路上の宗教者・芸能者と子どもの関係については、あらためて検討する必要があるらう。

右の『世のすがた』の記述には、以下のような続きがある。

…其事年を追て盛なりしが、何ゆへかはしらず、町々にておんぎやう無用といふ札を張出す、それより葛西金町半田稻荷といふ物もらひに変じて、赤き木綿の単衣を著し、頭を白き木綿にて包み、背に赤きくゝり猿を負、小さきもみの幌を持ち、鈴をならし、疱瘡も軽い、はしかも軽い、信心被成れ、葛西金町半田の稻荷といひて、其間に色々の事をうたひながらをどる、錢をあたふれば箱より土の人形など出して子供にあたふ、是も歳末に至り袋を持参して米を貰ふ…

先に述べた「おんぎやう」が家々より「無用」と牽制されたため、また別のスタイルの願人へと転じた、とある。この願人が掲げたのが葛西金町半田稻荷で、これは現在も葛飾区東金町に所在する神社である。社伝によれば、永久年間創建とされ享保の頃から麻疹・疱瘡・安産の神として信仰を集めたという。

江戸の名所について書き留めた『遊歴雜記』（文化十一年序）にも

取材されているが、当時の様子は以下のようにかなりすたれていたようだ。

同村半田稻荷明神は、光増寺の南凡三町にあり…稻荷の社内はさして広きにもあらず、総て石燈籠の類も漸く享保年間のみあり、社壇の造営は善尽して王子村の稻荷に能似たれども土地さむしく辺鄙なれば参詣至で稀に…彼江戸の方言に願忍と異名せし橋本町にある店坊主が、近年能此やしるの名を売歩行て、疱瘡も軽しなどいへど名程にも似ず、増て事事しき利生ある様子にも見請ず、社内の外構前通ばかりは朱の玉垣に作り、その外総て屋敷構も粗悪に聞に名高く、見て恠れるといふはこれならん…

社殿も粗悪で参詣が稀だという神社に対し、そこから離れた橋本町ではその神社の名を掲げた「願忍」が盛んに活動していたという。橋本町は江戸日本橋に所在し、当時は願人がよく現れる場所であった。先の『世のすがた』には、半田稻荷の願人がいつ現れたのか具体的な年号は記されていないが、文化年間前後であったらしい。このように、神社自体が盛況だった時期と願人が活動した時期には、ずれが見られる。前掲の、まかしよが半田稻荷願人に転じたとする記述からすると、橋本町で活動していた願人が実際に半田稻荷の社人であったかは疑わしく、名を借りただけとも考えられる。右のように、もともと橋本町に住んでいた下級宗教者によるものと見る向

きは、当時にもあつたようだ。

みたび『守貞謾稿』を引けば、この半田稻荷の願人についても項目が立っている。ここでは、「半田行人」と呼ばれている。

天保中、初めてこれを行ひ、今は廃せり。その扮、京坂の金毘羅行人と同じくして、白を紅に換ふるのみ。諸服必ず紅綿。手に紅綿の幟に半田稻荷大明神と筆せるを携へ、右手にれいをふり、痘瘡麻疹の軽を祈るに矯て、専ら諧謔踊躍す。

その芸能については、『世のすがた』や『遊歴雜記』に語られるところとほとんど差異はないが、成立時期については天保年間に始まりとしており、二十年ほど差異がある。また、半田行人を金毘羅行人と同じ出で立ちで色のみ違つとしているが、先に挙げたまかしよの項でもその格好を金毘羅行人と同じものとしていることから、まかしよと半田行人も装束のかたちはほぼ同じで、色を白から赤へ換えたものだったと考えられる。『守貞謾稿』には金毘羅行人の項も別に立っているが、そこで述べられる装束の描写は『世のすがた』とほぼ同じである。

半田の願人の姿は、錦絵でも確認できる。一つは麻疹絵、もう一つは役者絵である。

錦絵の中でも麻疹に関するものを麻疹絵と呼び、文久二年の麻疹大流行の際にはとくに多くの麻疹絵が出版された。麻疹に関する対処法などを知らせる文章とともに、麻疹退散の願いを込めた画が描

かれることが多く、その中に麻疹の疫病神を叩きのめす役として半田稻荷の願人が登場するものがある⁷⁾。着衣は赤色だが頭巾は白く、ちょうど『世のすがた』の描写と同じになる。半田の願人が見られたのが文化年間からとすると、文久二年にはすでに五十年という長い年月が経過しており、その頃も実際に半田の願人らが存在していたのか、これも定かではない。

もう一方の役者絵については、文化一〇年三月に中村座で坂東三津五郎が半田稻荷に扮して長唄を演じた際のものが何種類か、現在も残っている⁸⁾。こちらは、半田の願人が実際に活動していた当時の絵と言えるだろう。現存する絵では、装束や持ち物に少しずつ差異が見られるが、単衣の前をはだけて袴を着けていないものが多い。また、頭巾は共通しており、耳の上と頭頂部に布を大きく束ねた飾りのようなものをあしらった特徴的なかたちである。これらの衣装は、舞台上演じるにあたって実際の願人よりも整えられていたとも考えられるが、単衣のみという軽装は実際のものにかなり近かったのではないだろうか。

そう考えられるもう一つの理由は、『四季交加』の挿絵に描かれている人物に、この役者絵の装束とよく似た格好の願人が見られるからである。場面は十一月部分の上段右端で、特徴的な頭巾の形、首から下げた箱、手には鈴を持っている。ただ、半田の願人の場合は箱に「半田稻荷」などと書かれているのに対し、こちらは何らかの文様が描かれている。『四季交加』が出版されたのは半田の願人が活動していた時期よりも前のため、おそらくこれは半田の願人の元と

なったという「おんぎやう」、あるいはまかしよなのだろう。描かれる場面も、「おんぎやう」が冬の時期に現れるとする『世のすがた』の記述と一致している。となれば、半田の願人の装束とは、まさしくまかしよから色を転じただけのものだけということが、こうした絵画からもはっきりとわかる。

(四) おわりに

今まで見てきたように、『守貞謾稿』や『嬉遊笑覧』など近世後期に記された書物をたどっていくと、願人に関する記述においてしばしば食い違いが見られる。

当時よりも遡る時代のこととなれば、参考とする書物があっても正確なところを記すのは難しかったはずだ。しかし、こうした混乱ぶりが、逆に近世後期の願人の状況を表しているのではないだろうか。すなわち、半田の願人がまかしよから転じたものであったように、下級宗教者内での変化や入れ替わりが頻繁に起こっていたのではないかと考えられる。近世期の江戸における信仰のはやりすたりの激しさは、流行神の研究などで明らかにされており、願人もまたこうした現象に左右されたことは、十分に想像できる。

わいわい天王のように同じ系統の芸能であっても時期によって変化したり、まかしよと半田の願人のように同じ願人が転身したと見なされていたり、路上の宗教者、芸能者をめぐっては、それぞれに複雑な変遷が推定される。そうした変化を要請するものはなんで

あったか。そしてその変化の際にどのような信仰、どのような芸能の形態が新たに選択されていくのか。芸を享受する側との関係性を念頭に置きながら、右の点を中心に、検討すべき点はまだ数多く残されている。

1 『国史大辞典』には、「願人坊」という項目で「江戸時代、諸国を徘徊して門付・大道の芸能にたずさわった下級の宗教者の称」と説明される。『守貞謾稿』などを見ると、当時から「願人」という名で総称されていたようである。

2 病気の治療には赤色が効くという観念があり、病人の衣装・呪具（錦絵、お守りなど）に使用された。流行病が発生したときにも、赤い紙に「馬」などの字を書いて家の門口に貼っておくというまじないが盛んに見られた。立川昭二「隠れた治癒力 紅絵本・軍談本・戯草紙」、『文学』五十七号、桂井和雄「俗信の民俗」（岩崎美術社 一九七三）など参照。

3 疱瘡にかかった子どもに、赤一色で刷られた錦絵（赤絵）や絵本、達磨の張り子を見舞いの品として贈ったり、赤い頭巾や着物を着せて疱瘡が軽いことを願うという風習が、近世紀に盛んに見られた。また、俵の蓋などに赤い幣束を立て、赤飯の握りなどを備えて村境や辻へ置いてくるといふ疱瘡送りの習慣は、戦後まで残っていた。

4 東北大学附属図書館狩野文庫画像データベースで閲覧できる。

5 『嬉遊笑覧』は、まとまった書物としての成立年代自体は文政以降になるが、それよりも前から書きとめたものを元にしていることから、正確な記述年代は不明である。

6 現在でも、年中行事の天神講などは子ども中心に行われている。

7 『やはり病の錦絵』内藤記念くすり博物館 二〇〇一―三十三ページ参照。
早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システムで閲覧できる。ここでは四種類の役者絵が確認でき、そのうちの一枚には山東京伝による賛も添えられている。

9 宮田登『江戸のはやり神』（ちくま学芸文庫 一九九三）など。

名所図会と絵画資料との照合の面白さ

研究報告に代えて

日本文学研究専攻（教員） 中村 康 夫

共同研究を進めている中では、中村担当の部分は俎上にあがっていないが、簡単な可能性だけを示して、報告に代える。

国文学研究資料館のデータベースで、国文学研究資料館が所蔵する名所図会を検索すると本報告末尾に掲げたような典籍がヒットする。その数は57点で、同一書名の物を省いてもかなりの点数になる。

このうち、五畿内名所図会の『都名所図会』と、近世初期の京都を描写した資料としてはよく知られている『都名所図巻』とを比較して、絵画資料を照合する面白さを簡単に述べる。

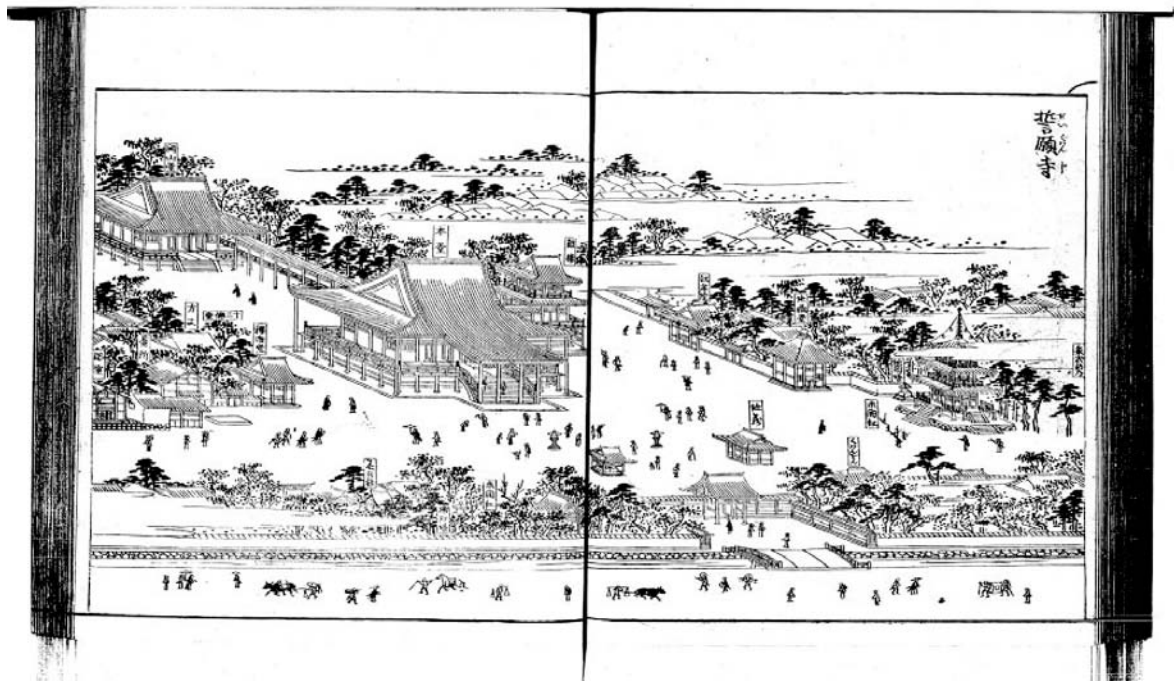
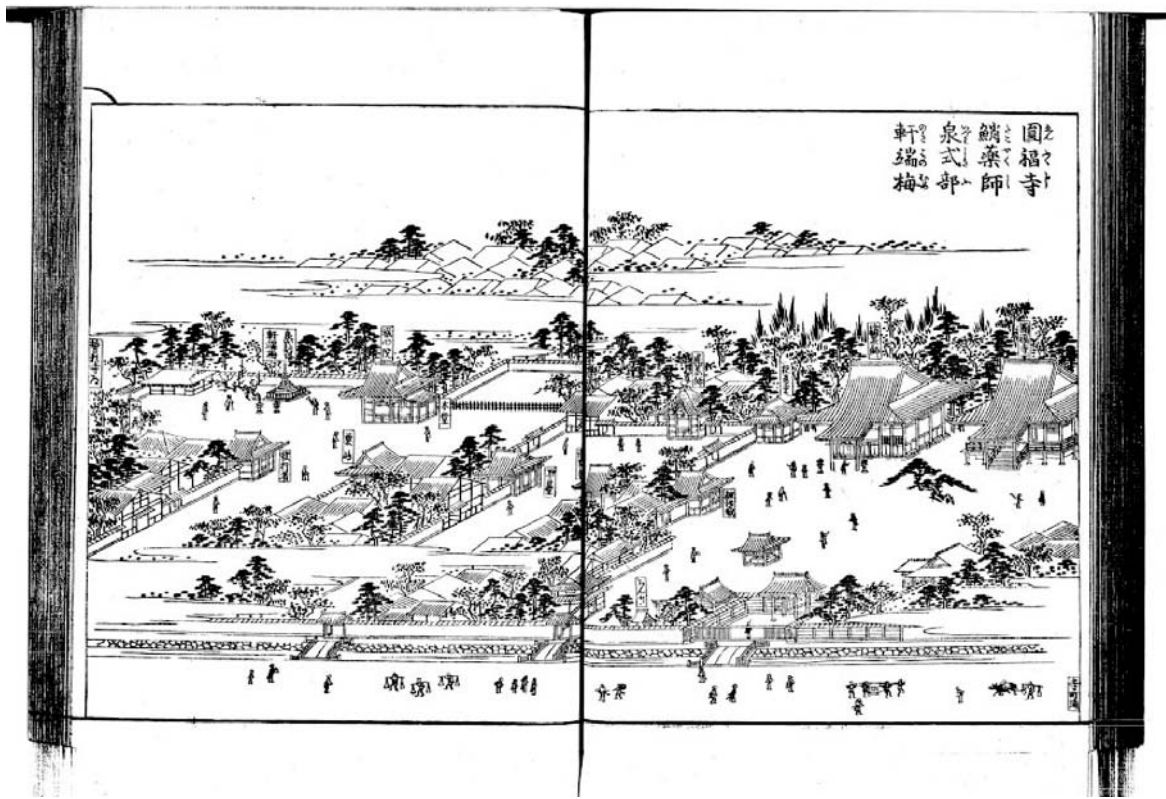
名所図会の調査を進めることで、文学を媒介として、歴史と文化の変遷が立体的になる。

下の絵は『都名所図巻』冒頭に近くに描かれた物で、誓願寺と和泉式部の碑と和泉式部の梅とが描かれている。要法寺も描かれているが、要法寺は大火のあと移転しており、五畿内名所図会が刊行された頃にはここにはない。

描いている角度に問題があつて、位置関係が正確にはつかみにくい。位置関係は、多分五畿内名所図会のほうが正確に描いていると思う。



その次の絵が五畿内名所図会の『都名所図会』の中から、和泉式部の碑と和泉式部の梅を描いた頁と、続きの頁に描かれた誓願寺の絵、さらに、和泉式部関連の頁を掲げた。比較して、眺めていただきたい。





- 国書内同名異書連番, 分類, 作品著者名, 成立年, 書誌件数
 No. 書名, コレクション略称, 請求記号, 刊写の別, 刊年or書写年, 冊数, 残欠, 書誌種別画像マーク
 淡路国名所図絵, K, 1, 地誌, 暁鐘成作, 嘉永四序・慶応二刊, 1
 1 淡路國名所圖會, 国文研, ヤ6-263-1~5, 刊, 明治27, 5冊
 阿波名所図会, K, 1, 地誌, 探古室 / 墨海撰・画, 文化八武者小路実純序・一寿亭龜雄跋, 同刊, 1
 2 阿波名所圖會, 国文研, ヤ6-191-1~2, 刊, 2冊
 和泉名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 籬島撰, 寛政八刊, 3
 3 和泉名所圖會, 国文研, ヤ6-35-1~4, 刊, 寛政8, 4冊
 4 和泉名所圖會, 国文研, ヤ6-73-1~4, 刊, 寛政8, 4冊
 5 和泉名所圖會, 国文研, ヤ6-260-24~25, 刊, 2冊
 伊勢参宮名所図会, K, 1, 地誌, 部 / 関月編・画, 寛政九刊, 1
 6 伊勢參宮名所圖會, 国文研, ヤ6-231-1~6, 刊, 6冊
 嚴島図会, K, 1, 絵画地誌, 岡田 / 清編, 天保一三刊, 1
 7 嚴島圖會, 国文研, ヤ6-189-1~10, 刊, 天保13, 10冊
 江戸名所図会, K, 1, 地誌, 松濤軒 / 斎藤 / 長秋 (斎藤 / 長秋) 著, 文政一二自序・天保五 七刊, 5
 8 江戸名所圖會, 国文研, ヤ6-5-1~20, 刊, 天保5?天保7, 20冊
 9 江戸名所圖會, 国文研, ヤ6-45-1~20, 刊, 天保5?天保7, 20冊
 10 江戸名所圖會, 国文研, ヤ6-48-1~15, 刊, 天保5, 15冊, 卷之六・七欠
 11 江戸名所圖會, 国文研松野, 54-273-1~20, 刊, 天保7, 20冊
 12 江戸名所圖會, 国文研長谷, 93-83-1~20, 刊, 天保5(卷一?三), 20冊
 江戸名所図会, N, 0, 浮世絵, 歌川 / 豊国 / 三世画, 1
 13 江戸名所図会 / 隅田川, 国文研, 23-112, 刊, 1枚
 近江名所図会, K, 1, 地誌, 秦 / 石田(村上 / 石田) 寛政九刊, 1

- 14 近江國名所圖會, 国文研, ヤ6-192-1~4, 刊, 文化11, 4冊
尾張名所図会, S, 1, 地誌, 岡田 / 啓, 弘化元刊, 1
- 15 尾張名所圖會, 国文研, ヤ6-82-1~13, 刊, 明治13, 13冊
甲斐叢記, K, 1, 地誌, 大森 / 快庵著, 前輯嘉永四刊, 1
- 16 甲斐叢記, 国文研, ヤ6-53-1~2, 刊, 嘉永4, 5冊
鹿島志, K, 1, 地誌, 北条 / 時鄰, 文政六刊, 1
- 17 鹿嶋志, 国文研, ヤ6-155-1~2, 刊, 文政6, 2冊
花洛名勝図会 / 東山之部, K, 1, 地誌, 木村 / 明啓(暁鐘成), 文久二刊, 1
- 18 東山名勝圖會, 国文研, ヤ6-187-1~8, 刊, 文久2, 8冊
河内名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 籬島著, 享和元刊, 3
- 19 河内名所圖會, 国文研, ヤ6-36-1~6, 刊, 6冊
20 河内名所圖會, 国文研, ヤ6-52-1~6, 刊, 享和1, 6冊
21 河内名所圖會, 国文研, ヤ6-260-21~23, 刊, 3冊
- 紀伊國名所図会, K, 1, 地誌, 高市 / 志友(初・二編), 初・二編文化九、三編天保九、後編嘉永四刊, 3
- 22 紀伊國名所圖會, 国文研, ヤ6-30-1~20, 刊, 文化8?嘉永4, 20冊, 初編・二編卷之三下・二編卷之四上・三編卷之一欠
- 23 紀伊國名所圖會, 国文研, ヤ6-39-1~10, 刊, 文化9, 10冊, 初?二編存
24 紀伊國名所圖會, 国文研, ヤ6-115-1~10, 刊, 文化9, 10冊, 初編存
- 木曾路名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 籬島編, 文化元自序、同二刊, 3
- 25 木曾路名所圖會, 国文研, ヤ6-21-1~7, 刊, 文化2, 7冊
26 木曾路名所圖會, 国文研, ヤ6-22-1~6, 刊, 文化11, 6冊
27 木曾路名所圖會, 国文研, ヤ6-101-1~7, 刊, 文化2, 7冊
- 狂歌扶桑名所図会, K, 2, 狂歌, 檜園 / 梅明編, 天保七 一三刊, 1
- 28 狂歌扶桑名所圖會, 国文研, ナ2-518-1~5, 刊, 5冊
五畿内名所図会, N, 0, 地誌, 1
- 29 五畿内名所圖繪, 国文研, ヤ6-260-1~40, 刊, 40冊
西国三十三所名所図会, K, 1, 地誌, 暁鐘成 作, 嘉永元自序、同六刊, 1
- 30 西國三十三所名所圖會, 国文研, ヤ6-1-1~10, 刊, 嘉永6, 10冊
住吉名勝図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 湘夕(秋里 / 籬島)著, 寛政六刊, 2
- 31 住吉名勝圖會, 国文研, ヤ6-251-1~5, 刊, 寛政6, 5冊
32 住吉名勝圖會, 国文研, ヤ6-260-36~40, 刊, 15冊
- 摂津名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 湘夕(秋里 / 籬島)著, 寛政六序、同八 一〇刊, 4
- 33 攝津名所圖會, 国文研, ヤ6-27-1~12, 刊, 12冊
34 &K84cc;津名所圖會, 国文研, ヤ6-29, 刊, 1冊, 卷之四下存
- 35 攝津名所圖會, 国文研, ヤ6-128-1~12, 刊, 寛政8?寛政10
36 攝津名所圖會, 国文研, ヤ6-260-26~35, 刊, 享和2, 10冊
- 善光寺道名所図会, K, 1, 地誌, 豊田 / 利忠編・画, 天保一五序、嘉永二刊, 2
- 37 善光寺道名所圖會, 国文研, ヤ6-38-1~5, 刊, 5冊
38 善光寺道名所圖會, 国文研, ヤ6-193-1~5, 刊, 嘉永2, 5冊
- 天保山名所図会, K, 1, 地誌, 暁鐘 成編・画, 天保六刊, 1
- 39 天保山名所圖會, 国文研, ヤ6-273-1~2, 刊, 天保6, 2冊
東海道名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 舜福(秋里 / 籬島)編, 寛政九刊, 4
- 40 東海道名所圖會, 国文研, ヤ6-37-1~6, 刊, 寛政9, 6冊
41 東海道名所圖會, 国文研, ヤ6-49-1~6, 刊, 6冊
42 東海道名所圖會, 国文研, ヤ6-50-1~6, 刊, 6冊

- 43 東海道名所圖會, 国文研長谷, 93-82-1~6, 刊, 寛政9, 6冊
成田名所図会, K, 1, 地誌, 中路 / 定俊著, 嘉永七序、安政五刊, 1
- 44 成田参詣記, 国文研, ヤ6-257-1~5, 刊, 5冊
陸奥名碑略, K, 1, 地誌, 藤塚 / 東郷, 文化一三刊, 1
- 45 陸奥名碑略, 国文研, ヤ6-41, 刊, 1帖
都名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 籬島著, 安永九刊, 4
- 46 都名所圖會, 国文研, ヤ6-40-1~6, 刊, 安永9, 6冊
47 都名所圖會, 国文研, ヤ6-77-1~6, 刊, 天明6, 6冊
48 都名所圖繪, 国文研, ヤ6-260-1~5, 刊, 5冊
49 都名所圖會, 国文研長谷, 93-77-1~6, 刊, 天明6, 6冊
都名所図会, K, 2, 地誌, 秋里 / 籬島著, 天明七刊, 3
- 50 拾遺 / 都名所圖會, 国文研, ヤ6-176-1~5, 刊, 5冊
51 拾遺 / 都名所圖繪, 国文研, ヤ6-260-6~10, 刊, 5冊
52 拾遺 / 都名所圖會, 国文研長谷, 93-78-1~5, 刊, 天明7, 5冊
大和名所図会, K, 1, 地誌, 秋里 / 籬島著, 寛政三自跋, 5
- 53 大和名所圖會, 国文研, ヤ6-2-1~7, 刊, 7冊
54 大和名所圖會, 国文研, ヤ6-17-1~7, 刊, 寛政3, 7冊
55 大和名所圖會, 国文研, ヤ6-104-1~7, 刊, 寛政3, 7冊
56 大和名所圖會, 国文研, ヤ6-260-16~20, 刊, 5冊
57 大和名所圖會, 国文研長谷, 93-80-1~7, 刊, 寛政3, 7冊

日本中世・近世の地誌と風俗

二〇一〇年三月二十日発行

編者 総合研究大学院大学「日本中世・近世の

地誌と風俗」研究プロジェクトチーム

発行 総合研究大学院大学文化科学研究科

為総合研究大学院大学 禁無断転写